

小田原史談

第247号

発行所 小田原史談会
小田原市東町 1-21-18
平倉方 TEL (34) 8363

《講演録》

明石人骨の発見者・直良信夫を語る

松本清張「石の骨」のモデル

杉山 博久(幾一)



直良信夫との出会い
一九五八年(年号でいうと昭和三十三年)の暮れに近いころ、学部を卒業するという機会に、文学部では論文という程ではないですけど卒業論文をしなければ

ならない。そんな中で私は洞富雄先生に指導をお願いしに行きました。種子島銃の伝来の影響や南京虐殺事件などの著作のある先生ですが、「先生ひとつ卒業論のご指導をお願いします」と申し上げましたら、「いや、理工学部には直良信夫という偉い先生がいる。僕が紹介してやるから、少し直良さんのところに行つて勉強してください」と言われました。そこで、直良先生のところに出掛けて「卒論のご指導をお願いします」と。それが先生との最初の出会いです。

以来、一九八五年(昭和六十)十一月二日、島根県出雲市にて先生が八十三歳でお亡くなりになるまで、四半

世紀を越えていろいろとご指導をいただいた。長い間先生にご指導いただいた思い出は沢山あるけれど、今日はこういう思い出を絡めながら、この直良信夫という一人の研究者の生涯について少しお話をしていきたいと思ひます。

最後の博物学者

一九八五年、直良信夫の逝去の折り、「最後の博物学者」という修辭を冠して訃が報じられたように、先生は非常に広汎な学問分野に優れた業績を遺した研究者でした。

「博物学」とか「博物学者」という言葉は、すでに死語になってしまったようですが、かつて「博物学」といった学問領域があつて、地質学・鉱物学・動物学、そして植物学など自然科学系の諸学を総合したもので、教科としての「博物」も存在しました。また、学問領域の広い研究者を「博物学者」と呼んだものですね。例えば和歌山県田辺市の南方熊楠がその好例です。

直良信夫も実に多方面に学的関心を展開して、各分野に熊楠に劣らない優れた業績を遺した研究者でした。考古学のほかに、古生物学(動物・植物)・古人類学・現生動物植物学・歴史地理学・古代農業学・小動物の生態

二百四十七号(平成二十八年十月号)

目次

《講演録》

明石人骨の発見者 直良信夫を語る

—松本清張「石の骨」のモデル—

杉山 博久・・・ 1

小田原の郷土史再発見

敵将を祭神に祀つた

北條氏綱と居神社

石井 啓文・・・ 8

雪村周継と小田原

深野 彰・・・ 13

吉田島にあつた「喜楽座」

藤平 初江・・・ 18

小田原桐座について(七)

—由緒書の検討を中心に—

荒河 純・・・ 22

忘れられた地名(二)「袋町」

杉山 虔・・・ 7

旅のつれづれ俳句日記

劍持 芳枝・・・ 12

新会員紹介・・・ 12

史跡巡り通知 初詣予告・・・ 27

第十四回史談会セミナー報告・・・ 26

第十五回史談会セミナー予告・・・ 26

特別賛助会員

落穂集・・・ 28

学的研究などに及んでおり、それぞれの分野で第一級であったと評されています。古道や峠路も学問的研究の対象でした。これは自分の先生だから身びいきと思われられるかもしれませんが、決してそれだけではなく学界の定評であろうと思います。

ただ、直良信夫といってもあまり馴染みがない名前であるかも知れません。なにしろ先生が活躍したのは五十年以上も前のことであり、地味な古生物学の研究を主とし、テレビなどに出演することもありませんでしたから、一般的に知られる機会は少なかつたと云えると思います。同業でも若い人だと先生を覚えていない者がいなくなつたんです。今日お出でいただいた方に直良信夫を是非覚えていただけたらなと思います。

演劇の好きな方ならば、十年ほど前に劇団民芸が「明石原人・ある夫婦の物語」の演題で全国を公演して廻っていたことはご記憶にあるかも知れないし、また、古い作品であるが松本清張のファンならば、「石の骨」という小説を目にしたことがあるのではないのでしょうか。ともに直良先生をモデルとしたものです。さらに、高等学校で日本史を履修した方ならば、「明石原人」とか「ニッポナントロプスアカシエ

ンシス」という名辞は、教科書の脚注で見たか一度くらいは耳にしたことがあるだろうと思います。

幼少期、そして単身東京へ

直良信夫は、一九〇二年(明治三十五)一月に現在の分県臼杵市二王座で出生しました。次男坊だったと思います。もともとは直良姓ではなくて、村本姓でした。

村本家は旧臼杵藩の藩士であつて、由緒はある家柄だつたらしいんですが、典型的な没落士族でした。明治維新がありまして版籍奉還、廃藩置県とかその中で先生の祖父・父親は旧藩士としての俸禄が支給されなくなつてしまふ。一時金の支給で後は支給されなくなるので、それを元手に何か収入の手立てを考へなければならぬということ、有り金全部を持って福岡の町へ出て行つて、見事に全部失つてしまふ。

だから小学校は通学させてもらつたけれども上級学校(中学校)への進学など思いもよらないことでした。それでも母親のシメさんは無学文盲だったといひますけれども、先生が勉強することには一応理解を持っていたらしくて、高等小学校に入学出来たのは幸いでした。が、わずか

一年通つたあと、二年に進級時には、口減らしのこともあつて、東京の親戚に養子に出されたのです。一九一四年(大正三)、わずか十二歳の少年が、独りで、臼杵から別府に出て、海路を神戸に至り、そこから汽車で上京したのです。

東京では、自ら手続きして、王子の尋常高等小学校二年に編入を許され、翌年三月に卒業することが出来ましたが、後に文学博士・早稲田大学理工学部教授・東京科学博物館研究員となる直良信夫の正規の学歴は、この「王子尋常高等小学校高等科卒業」だけなんです。

このことは先生を苦しめたようです。ふと、「僕は貧乏人の小倅で学歴もないからね、学問の世界で生きるの大変だつたよ」と言われることがありました。八十ぐらいになつてくると気も弱くなつてたんですが、「学歴はそうでも、先生は素晴らしい仕事を沢山やって来たじゃないですか。だからそんなこと言わないでください。俺は直良信夫だと胸を張つて生きて下さい」と、生意気にもそんなことを申し上げたことがあります。先生は苦笑してましたけどね。でも生涯そういう思いは抜けなかつたようです。

松本清張と「石の骨」

松本清張がそうなんですよ。彼も高等小学校卒でしょ。それで新聞社の給仕みたいなことやつて、やがて小説を書いて日本を代表する作家になつたと言つていいでしょう。その松本清張も生涯低学歴だということを感じていたようです。

私は清張ファンではないですがから清張の本はあまり読んでいないんですけど、清張の評伝を讀んでましたらね、その中に清張の言葉として、「人生には卒業学校の名前を記入する欄はない」という言葉があるようです。

清張の場合はこの低学歴ということを終生克服する。学歴がないのが何なのだ。大学を出てから偉いわけじゃないだろう。社会に出てからどれだけ仕事をしたか、それによって人間の価値は決まるんだ。そういう気概をもつて、大分清張も突つ張つたようです。

或る非常に温厚な先生が、「杉山君、僕は今の直良さんは好きなんだ。だけど若い頃の直良さんは嫌いだつたね」と言われたことを覚えています。「今の直良さんは好きだ」というのは私に氣を使つたんでしようが、やつぱり若い時はかなり戦闘的などころがあつたようです。

低学歴と戦いながら自分の能

力をたのみとして、それをその世界に於いてその地歩を固めていこうという人物に対して、清張が若い頃には非常に肩入れしていたようですね。それが「石の骨」という作品を生み出した。

清張は考古学者の中では直良信夫と、もう一人別の考古学者を題材として作品を作り上げていて、「断碑」という小説があります。これは森本六爾という弥生時代の研究者を扱った作品なんです。その森本六爾も直良先生よりは恵まれていませんけれども、奈良の畝傍中学を卒業しただけで考古学の世界に飛び込んだ。そして弥生文化の研究では現在の考古学会にも大きな影響を与える功績を残している人です。確か昭和十一年だったと思いますが、わずかに三十三歳という年で夫人のミツギさんとともに結婚で命を絶つてます。こういうような人物を非常に感情移入しながら作りあげた作品が「断碑」であり「石の骨」である、と私は思っています。

帰郷、再度の上京

先ほど来話しているように、先生は尋常小学校卒という学歴しかないわけです。その王子の尋常高等小学校を終えようと、養子先の叔母との折合いが悪く、その一年は先生にとって辛い月

日であったらしい。直ちに帰郷してしまつたのです。しかし、帰郷した白杵でも先生の居所はなく、間もなく大分の書店に住込みの小僧として勤めたりしました。ただ、先生の勉学への意欲は強く、講義録で学び続けたいらしいです。二年ほどを過ぎた後、一九一七年(大正六)になると、今度は王子の尋常高等小学校の時に担任かなにかで世話になつた先生を頼って上京してきます。その先生の世話で上野保線事務所の給仕の職にありつきます。ここで給仕として幾許かの給料を貰える身分になりました。

岩倉鉄道学校、人文科学との出会い

そこから先生の勉学が始まる。まず早稲田工手学校へ入学します。たまたまここで校長だつたのが早稲田の理工学部の教授だった徳永重康という先生でした。この徳永という先生は後々本当に直良先生が世話になる方で、まあ、徳永に拾ってもらつたと言えます。

そして翌年(一九一八年)には岩倉鉄道学校に入学します。岩倉鉄道学校は鉄道員の養成機関でしたが、工業化学を履修しました。先生、よく頑張つたなと思います。昼間は保線事務所

の給仕として働く、そして夜は今でいう各種学校といひますか、自費で通学する。ですから日常の生活は二時になって寝て、六時に起きる。この頃からその後四十代、五十代ぐらいになつても、仕事をしなきゃいけない時には二時就寝、六時起床という生活を繰り返していたようです。



図2 直良信夫先生

岩倉鉄道学校の二年生になると、特待生になつて授業料が免除になる。卒業時には成績優秀で時計をもらった。昔はそういう風習があつたようです。

そして、二年間の課程を終えますと創設間もない農商務省の付属機関で臨時窒素研究所へ勤めることが出来た。「何を研究してたんですか」と聞くと、ブッチャー氏法による空中窒素固定法の研究、私には何だか分からない研究をしてたらしい。そのころは日本の軍国化の中で窒素が必要になつたらしいですね、それで国の肝いりでこうした臨時窒素研究所が創設され、そのの研究所に入りました。

これで先生は貧乏生活から解放されます。ところが先生に言わせると、「私は研究所の中でか

えって孤独になつたよ」と。周囲は帝国大学出の研究員で、年齢的にも五、六歳は違つたらしいから、研究所の休み時間に仲間うちで話をするということはない、「僕は一人でいたよ」と言われます。

一人でいて何をしたか。昼休みなどには研究所の近隣を歩き廻り、附近に散在する遺跡を探訪しては土器片や石器などを採集し、時には小発掘を試みることもあつたらしい。関東大震災以前にはまだ東京の中心部に近いところでも遺物を採集できる土地が其処彼処に残つていたように、どうかしてその時代の文化を究明する材料にならないかと、石器や土器を拾い集めていたのです。

縄文土器と弥生土器の比較

考古学は人文科学として発展してきた学問です。が、先生は「俺は今、化学の分野に生活して

るので、そういう方面の知識を考古学研究に活かすことはできないだろうか」と考えた。当時大正も十年近くになってくると縄文土器と弥生式土器という区別があることは分かっていたんです。では縄文土器と弥生土器がどのような関係なのかは、なかなか学界で統一した理解が得られなかった。

そして当時学界や一般の人々に広く浸透していた理解は、縄文式土器のことを厚手土器、又はアイヌ式土器と呼びまして、これは先住民族であるアイヌが作成し使用した土器である。弥生土器は我々の直接の祖先である大和民族が作り上げた土器である。大和民族は優秀で高等な民族であったから、劣勢なアイヌ族を追っていき、アイヌ族はただただ生活環境の悪い土地に押し込められていく。そういうアイヌ民族と大和民族の二つが作ったのが縄文土器と弥生土器であると考えていたんです。縄文土器のことをアイヌ式土器と呼ぶのは鳥居龍藏の意見が一般の人々に受け入れられていた証拠だと思ふ。

私が考古学を始めた五十年前でもまだ地方に行くと、縄文式の「竪穴住居」という立て看板が立っているところもありました。

直良先生は、化学的に土器を分析することで検討出来ないだろうかと考えた。この二つの時(縄文と弥生)の化学的な比較研究に手を付けるわけです。用いられている土器の土、これらを我々は胎土と言います。一つ目はその胎土の組成、どのような鉱物を含んでこれが作られているのかという組成・組織の問題。二つ目はそれを焼いて土器を作るがその土器を焼く温度、これを我々は焼成温度と言います。この焼成温度は縄文式と弥生式でどう違うかという比較。

更にはその土器が容器であり物を入れる道具であったとしたら、液体等を入れた場合、その浸透性にどの程度差があるか比較研究をしてみようというように、逐一比較研究をしていった。そんな方法で考古学を考える人は当時おりませんでした。

そういう全く新しい方法で考古学研究をしているのですが、たった一人で研究やってるわけですから、原稿を作成してもそれを発表する場がなかなかないわけです。しかし講演会があると先生はいつも出かけて行ったり、京都大学の教授にまでなる人で、天皇制のタブーに触れるようなことを平然と口にしていたのでなかなか京大教授という地位に

つかなかった人ですが、論争の大好きな先生なんです。その先生の講演があると直良信夫はいつも出かけて行ったらしい。毎度顔を見てみると、喜田貞吉のほうも、「ああ、またあいつ来ているな」と思ってくる。それで先生は今申し上げたように「化学的に縄文と弥生を比較研究することを私は考えているんだけど、どうだろうか」というような話をしたらしいんです。そして喜田貞吉が「それは面白いじゃないか。今まで誰もやらなかった方法だから一つ論文にまとめてみなさいよ」と纏めたのが先生の最初の論文、それが「目黒の上高地に於ける先史人類遺跡及び文化の化学的考察」という題名で『社会史研究』十巻一、二号に収載されたわけです。

こういうふうには、直良信夫は人が考えつかないような方法で考古学研究を進めていった。人文科学としてしか発達して来なかった考古学に、自然科学の手法を応用して研究を進める斬新な研究方法を取り入れ、先生は研究を進めていくわけです。

明石人骨の発見

「明石原人」と呼ばれた更新世(以前は洪積世と云った)期の人類腰骨を、兵庫県明石市の西八木海岸で発見したのが直良信夫

です。一九二四年(大正十三)に直良音と結婚し、翌年から明石市大蔵谷に居住していた直良先生は、その西八木の海岸に更新世期の堆積土層が露頭し、そこに旧象などの絶滅種動物や植物の化石が包蔵されていることを知って、執拗な探索を繰返していました。その結果、採集される化石群から復原される動物相(ファウナ)や植物相(フローラ)が、ピテカントロプス・エレクトスを出土したジャワのトリニールのそれと非常に共通する部



図3 明石人骨を発見した明石市西八木海岸 (カット・田中豊)

分があることを確認しました。そのジャワのトリニールとは何かと言いますと、そこでピテカントロプス・エレクトス、直立猿人と訳しますが、そういう人類の古い遺骨が検出された。それと非常に共通する部分があることを確認して、更新世人類の存在も予測されるとし、その探訪はいっそう拍車がかかりました。

その努力の甲斐あって、絶滅種獣類化石(旧象)を出土する堆積土と同一地層のなから、人類の手になつたと思われる石片Ⅱ石器の採集に成功したのです。

一九三一年(昭和六)四月十八日のことでした。その成果を、四月の『人類学雑誌』四六巻五、六号に「播磨国西八木海岸洪積世層中発見の人類遺品」として発表し、我国における旧石器文化の存在を主張しました。

せいぜい旧人か、数万年前ぐらいのものじゃないかと、先生は言っておられるんですが、長谷部言人は原人という大変古い時代を与えてしまった。そのことが先生に跳ね返って先生が苦勞しなきゃならないことになつてしまったのかなと思います。

無視と否定と

しかし、当時の日本の考古学界は日本の旧石器文化の存在に

ついては否定的でしたから、先生の仕事にはまったく冷淡でした。縄文文化まではいいのですが、それ以前の文化、旧石器文化なんていうのは、大陸の問題であつて日本には関係ないものだという理解が学会の大部分を占めていたのです。

ですから、この直良論文が発表されますと「フン」と無視される。一番いいのは無視なんですよ。無視してそんなものは無かつたことにしちゃう。それが一番簡便な反対論なんです。

それでも、その点では鳥居龍蔵はまだ良心的だったと思う。遺物も出土地も一瞥することもなく、痛烈な否定のための論説を発表したのです。欧州文献を翻訳・紹介することで旧石器文化研究の権威のように見られていた大山柏にしても同様でした。

そうして先生の採取した石器や更新世の動物や植物の化石を学問的に継承しないで、ただ「日本に旧石器文化があるはずはない」との先入観の中からそれを否定していった。先生には学問もないわけですし、後ろ盾になつてくれるような研究者は一人もいないわけです。先生は全く孤独の研究者だった。

こういう学界の一般的な風潮の中で「洪積世層の人類の遺体」を発見した、というニュースが

流れた。それが素直に学界に受け入れられると思えますか？ 考えられないことです。

特に声高に言ったのは京都大の二、三の研究者です。彼らは京都と明石は近いから明石へ行つたんですよ。しかし、骨は絶対に見ていないはずですよ。物理的にも見ることは出来なかつたはずですよ。なのに彼らは「あれは自分たちが直良の案内で明石の海岸に行つた時に、崖の上から落ちたのを直良は知らないうちに拾つて帰つたんだ。そして、ああいう綺麗な色を付けたんだ。いつ付けたんだろうな」と、そういう噂を流した。学術論文で反論するのではなく、噂で明石原人を否定する意見を流したんですね。人の噂は伝わりやすい。良い噂は受け入れられないが、悪い方はすぐ受け入れられちゃう。

中傷の日々

そういうことで、直良信夫は人骨について一言も発表出来ないうで葬り去られてしまった。それは大変な中傷であつたらしいんですよ。それは死ぬまで続いています。出雲に引き上げられてからも、とんでもないデマが雑誌に載つたりね。雑誌を見て先生、思わずカッとして新聞の折込の広告の裏にね、「何でこん

な嘘が言えるんだ」と書きなぐつたものがあります。それは奥さんが捨てるつもりだったんです。先生の遺品の殆ど全てが佐倉の国立歴史民俗博物館に運ばれた後、持つていけない物が物置に残つていた。たまたま先生が亡くなつた後で、奥さんがご丈夫でおられた時に「物置に残りものがあるけど、必要なら持つていって」と言われた。そのなかに問題の紙片もあつたのです。これは面白い資料だ、いつか書く機会があつたら使つてやれ、とそんな気持ちで持つて帰つたんです。

だから明石原人の人骨発見は先生の学者人生にとっては非常に辛いことでした。大変なものを発見してしまつたので、逆に辛い学者人生を送らなくてはならなかつたと思います。

この骨は発表出来ないまま先生のお宅にしまわれていたんですが、一九四五年五月でしたか、東京大空襲があつて先生のお宅が燃えた時、他の資料や何かと一緒に全て燃えてしまつた。それで今ではもう見る事が出来なくなつてしまつたのです。

じゃ、なぜ明石原人という学名がついてるかというのと、長谷部言人教授がたまたま東大人類学教室に残つていた石膏模型・写真によつてそういうふう

に名づけただけであって、直良先生はその学名はあずかり知らないことだったのです。

考古学史のなかの縄文人と弥生人

これは研究史の話として聞いてください。「劣等民族のアイヌ民族が優秀な大和民族に追われて僻地に逃れて行った」。それは私が言っているのではなく、明治の研究者が言っているのです。明治の作家に江見水陰という人がいた。硯友社系の作家ですが、自分の弟子や仲間の芸術家を誘って蛮勇採集隊と称して東京から関東一円の貝塚を掘りまくったことがある。その活動の経過を「地中の秘密」或いは「地底探検記」といった書物にまとめあげたものがあります。その中に考古小説と題して「三千年前」という作品があります。大正六年に初版本が出て何版か版を重ねているようです。

その中で縄文時代の末頃の多摩川あたりの情景が出てくる。我々の祖先はもととずつと北の寒い地にいた。それがだんだん勢いを得てこの細長い島国を南へ南へと成長していった。そして海を渡って九州へということなのでしょう。

ところがその頃の段階になって高天原の人々が鉄の剣と鏃を

持つて我々に攻め込んできた。石の道具しか持たない我々の仲間、その高天原の人々に追われ追われてまた北へ押し返された。そして今この多摩川の左岸、東側まで退くことになってしまった。そういう昔語りです。

縄文土器を使っていたのはコロポックルであるというコロポックル説を坪井正五郎が唱えた。坪井の弟子であった鳥居龍蔵は明治三十年か北方千島のほうへ探検に行つてアイヌの生活状況が縄文のそれと極めて似ていることから、縄文人はアイヌ人であることを唱え始める。人類学的には小金井良精がアイヌ説を唱えていたと思います。

そういう縄文土器と弥生土器の差を、それを作成・使用した民族によって二つの土器が作られるようになったというのが定説になりました。

縄文土器の担い手が北から南へ来てまた北に逃れた。明治二十年代に既に山形・鶴岡の羽柴雄輔という人が、「古い時代の日本に民族の大移動と言つてもいい大変動があった」と言っている。それを私は「南進北退論」と呼んでいます。

そのような状況の中で、先生は土器の化学的な分析によってその相違を解明しようとした。先生は考古学の鉄則である自然

の堆積状態の中で上層にある遺物は下層にある遺物より新しいことは認識してらんですよ。認識しているけれど、残念だったのは、それを層位編年という考古学の考え方の中で弥生式土器は縄文式土器より新しい時期のものであるというふうには認識しなかった。ほぼ同じ時期、その両者のぶつかりあいだと考えた。だから、縄文式土器を使っている人々の所へ弥生式土器を持った人が攻め込んできた。そして縄文土器を使っていた人がより奥地へ追いやられてしまったと考えた。肝心なところでもう一步踏み切つてくれれば層位研究の先駆者と評価できたが、それを先生はチョット失敗してます。

古代農業の発達史

先生の学位請求論文は「日本古代農業発達史」といつて、これが一九五七年(昭和三十二)に出

ているんですよ。私が先生から教えを受けたのはその少し後で、私の卒業論文の標題は「古代用水制度の研究」です。古代社会における灌漑用水の問題を検討したものです。

日本は、近世以前は完全な水稻耕作社会で、そこでは灌漑用水というのが非常に大きな意味を持つわけです。あの律令の令の解説書の中にも、「およそ水無き田は田なきと異ならざるなり」、水がない田んぼは田んぼがないのと同じだよと平安朝の頃から書かれている。

そこに注目して私は、卒業論文に「古代用水制度の研究」というのをやつたんですが、たまたま直良先生が学位請求論文として古代農業、水稻のことを扱った論文を発表していたので、冒頭にお話ししたように洞富雄先生に、「直良先生のところに行つて勉強してこい」と預けられちゃったのです。



図4 思索する先生
(カット・田中豊)

その段階では日本の古代農業は水稲耕作一辺倒だった。すべて稲作だった。ところが直良先生はそうじゃない。弥生時代の農業は粗放農業であって、雑穀や野菜、そういった畑作農業も伴っていたはずであるということとを既に主張している。

ところがこれは柳田国男等には全く受け入れられない主張だったらしくて、やがて柳田らが主催する稲作研究会から先生は手を引いてしまったのです。

人の二、三步前は歩くな

先生は、「杉山君ね、人の一步前を歩くのはいいよ。二歩、三步前を歩いては駄目だよ。馬鹿だ、気狂いだと言われて攻撃されちゃう」とよく言われました。私は謙虚に人の一步後を歩いてきましたけどね。

その二歩、三步前というのは、旧石器文化の存在の主張と明石人骨のことであつたと思う。

一步前というのは先生の貝塚研究で、それは見事といつてもいいと思う。それも単なる考古学者としてではなくて古生物学的な見地から他の人々に一步先行する学説を提示しているんです。

この直良信夫という人は、一口で言えば、(人の生涯にどれだけの仕事が出来るか身をもって



図5 馬場遺跡にて先生と筆者
(杉山博久著「直良信夫と考古学研究」より)

提示した学者だ」ということが出来ると思います。

今日は先生の著作などを説明することが出来ませんでしたけれど、とにかく私が蒐集し得た範囲ですが、生前に出た単行本は六三冊、雑誌・研究報告に収載された論文・随想は五二〇編を超えています。とにかくこの先生は筆の速い人なんです。今日の仕事は明日に残さない。もっと話したいこともあったのですが、また機会ありましたらいつでも来ますので。今日はどうも有難うございました。

(二〇一六年五月七日、於小田原市民会館)

徒然なるままに

―忘れられた地名(二)―
「袋町」

杉山 虔一

『永代日記書抜』正保二年十二月一日の条に、

「十二月朔日 一小田原朔日之夜丑ノ刻火事参候付、戌ノ刻申来ル。火本浜野庄左衛門夫より柳吉左衛門町田二郎左衛門渡部藤兵衛矢嶋兵衛田辺権右衛門以上侍屋敷六間夫より護摩堂筋寺町不残、新宿足軽小屋不残、新宿通町御番所袋町不残焼申由。」

とあります。筆者がこの文章を初めて読んだのは今から十年ほど前で、侍屋敷六軒と寺町、足軽小屋、新宿通町、番所、袋町が全焼したと理解致しました。

侍屋敷は田辺図あたりを丹念に読めば分かるかも知れませんが、筆者が興味を引かれたのは、寺町、足軽小屋、新宿通町、番所、袋町の地名です。

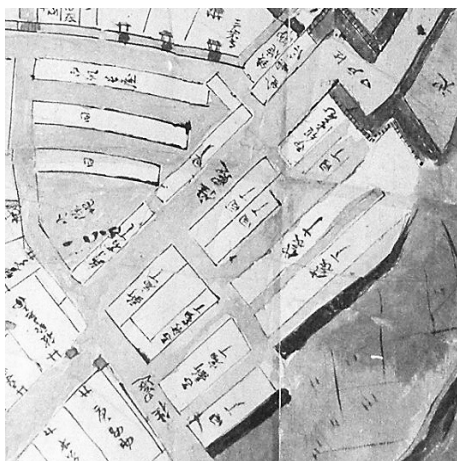
寺町は護摩堂筋と言う事から、現在では浜町四丁目の岡西の交差点から北側ではないか。

足軽小屋とは七枚橋の南東側一帯、新宿通町とは東海道に面した一帯、新宿町

番所とは東海道の江戸見付に設けられた番所のことでは、と考えました。

分らないのは袋町です。ところがこの地名が載っている地図を一枚偶然に見つけました。地図の名称は、『小田原市史 別冊 城郭編』によれば、「板倉本天保図」(小田原市立図書館所蔵)と云う地図です。

その地図の一部を参考のために掲載致しました。地図は後期大久保氏時代のものです、上記の文書の時代とは相当のずれがありますが、袋町(袋丁)が見られます。現在では、江戸時代の地名で「古新宿」と呼ばれる地域です。また、古新宿は現在「古新宿」と呼ばれている範囲より遙かに狭いことも分かります。袋町が消えてしまったのは、いつのことでしょうかね。



「板倉本天保図」(小田原市立図書館所蔵)

小田原の郷土史再発見

敵将を祭神に祀った北條氏綱と居神社

石井 啓文 ひろふみ

飛翔説と手向け歌

小田原の三大神社の一つ居神社は、祭神に早雲庵宗瑞が相模国平定に最大の難敵とした三浦義意を祀っている。

領主(北條氏)が、自領に敵将(三浦義意)を祀るのは珍しい。上野の西郷(隆盛)さん同様、義意が敵味方なく慕われていたからであろうか…。



居神社

『新編相模國風土記稿』(以下『風土記稿』と略す)の山角町の項に「居神明神社」を記している。

○居神明神社(中略)三浦荒次郎(彈正少弼と称す)平義意の靈を祀る。(中略)義意永正十五(十三)年七月十一日、北條早雲と戦負て自刃し、其首飛揚して當山の松梢に掛る(社地に枯松樹あり、径三尺首掛松と呼ぶ。按ずるに陸奥守義同・彈正少弼義意父子、早雲の為に三浦新井城にて滅亡し、義意の首を當所に梟せしを、かく奇怪の説を儲しなるべし)。三年眼未だ閉ず、往返の人民其天兔に遭て命を殞すもの少なからず、因て總世寺沙門(僧侶)忠室、和歌(うつとも夢ともしらぬ一眠り浮世の隙を曙のそら)を詠じて、怨靈を化導せしかば、頸松梢より忽墮、(按ずるに此事【小田原記】北條五代記等に載す、但和歌を手向しかば首忽墮して白骨となりしとあり)且空中に聲ありて、今より永く當所の守護神となるべしと聞へしかば、即松下に祠を建、神と崇

むとなり。當町及板橋村の鎮守なり、祭禮六月十一日、隔年に神輿巡行す(巡行の次第、山角筋違二町より箱根口城内馬出門にて祈禱、大手に出、青物町欄干橋町より安齋小路に入、濱下り祈禱、夫より板橋村地藏道前に至る)此式、大永元年(一五一二)より始めりと云。

居神明神社の松の梢に三浦義意の首が飛んできたから祀つたとされる(飛翔説)が、それは「奇怪の説を儲し」作り話であり、事實は梟首であるという。小田原史談会の青木良一氏は『おだわら風土記考』で、編者(間宮士信)は飛翔説を「面白がれる話」であり、「さりげなく本当の由来を示唆してくれた」と言っている。

ところで、居神社入り口に「居神社と小田原市指定重要文化財「古碑群」と題した当市?説明板がある。

祭神三浦荒次郎については壮絶な創建伝説が伝わっている。

三浦半島の新井城主であった三浦荒次郎義意は、伊勢新九郎盛時(北条早雲)に攻城され、永正十三年(一五一六)七月十一日、父陸奥守義同とともに自刃した。戦後義意の首を当神社の松に晒し首にしたところ、三年間眼目せず通行人をにらみ、人々に恐れられた

という。また一説には義意自刃の際、その首は三浦半島から海を越えて小田原まで飛来し、井神の森の古松にかぶりつき、そのまま三年間通行人をにらみつけたという。そこで城下の僧が代わる代わる供養したが、成仏しなかった。これを聞いた久野総世寺の四世忠室存孝和尚が駆けつけ、松の下に立ってしばらく読経の後「うつとも夢ともしらぬ一眠り浮世の隙を曙のそら」と読むときしもの怨靈も成仏し、たちまち白骨となって地に落ちた。その時空より、「われ今より當所の守り神たらん」との声があったという。そこで社を建て居神社として祭つたといわれている。

飛翔説は「創建伝説」であるという。作り話か伝説か、作り話の根拠とする『小田原記』は「義同討死之事」を記している。

明れば永正十五(十三)年七月十一日辰の剋に打て出、小田原の陣を二町ばかり追立て切まくり、枕を双て討死す。三浦前陸奥守従四位下平朝臣義同、子息彈正少弼従五位下平義意、并家親大森越後守・佐保田河内守・同彦四郎・三須三河守以下、百余輩の屍は巨港の岸に散り、血は長城の窟に満つ、されば今に至るまで其怨靈ども此所に留りて、月曇り雨暗き夜は呼叫び、求食の声して野人村巷

の乳児を啼しむ、其後毎年七月十一日新井の地に亡霊あれて、往来の人の現に見え言葉をかはず事度々なりとかや。怖しとも愚なり。

(注)三浦義意自刃は、『小田原市史料編』中世Iの「建芳書状写」等から、永正十三年が定説である。なお、本稿では「北條」を用いたが、引用文献の「北條」は、そのままとした。

ここには、飛翔説も梟首も手向け歌もない。どうも『風土記稿』は何か間違えているらしい。

新井城で手向け歌

『北條五代記』は「三浦介道寸父子滅亡の事」を記している。

(前略)此威に皆敗北して敵もなければ(荒次郎義意、新井城で)みづから首をかき落し、死たりけり。され共首は死せず、眼はさかさまにさけ、鬼髭は針をすりたるごとく、牙をくひしばり、にらみつめたる眼のひかり、百れむの鏡に血をそそぎたるがごとく、さもおそろしさを、一目見たる者なうれつすれば此類又も見る人なし。是によつて有験の貴僧高僧に仰て、さまゝの大法秘法、呪せられけれ共、其しるしなし。三年此首死せず、小田原久野の總世寺の禪師来て、一首の哥を詠し給ふ。
うつとも夢ともしらぬ

一ねむり

浮世のひまをあげばの空

とよみて手向け給へば、眼ふたがりたちまち肉くちて、白かうべと成ぬ。此荒次郎死所のわたり百間四方は、今にをいて田島にも作らず草をもからず、牛馬其中に入て草をはめばたちまちに死す。故に歌造もよく知て入事なし(後略)

総世寺の禪師は新井城に来て和歌を手向けている。飛翔説、つまり「儲し話」も梟首もない。説明板とは話が違う、どういうことだろうか。

「北條記」諸本の記述

『北條史料集』(昭和41年3月、校訂・萩原龍夫)の解題は、「北條記」が一名「小田原記」であるが、いわゆる戦記物であり型にはまった文体や誇張した表現が多く、読むのに興味は起こしやすが、どこまで史実を述べているか疑わしく、作者・成立年代とも不明である。寛文十二年(一六七二)刊行の『北條盛衰記』も『北條記』と同じで、『小田原軍記』など、もつともらしく北條旧家臣と称する横井道可なる七十歳の人の作としているが、内容は前書と同じであるという。

さらに『北條記』の第三巻までは、『相州兵乱記』と同じであると見て、同書は江戸時代以前とされていることから、江戸時代になつて、『北條記』『異本小田原記』等

が同書を基に書かれているという。

『小田原北條記』は同書解説によると、「原題は『北條五代実記』『北條五代記』『北條盛衰記』などと称され、作者は江西逸志子とされているが本名はわからない。天明三年(一七八三)の刊行であるが、序文に寛文十二年(一六七二)九月が記されている」という。

そこで各種「北條記本」を調べ下表にまとめた。

なるほど、『北條記』と『相州兵乱記』の「義同討死之事」は全く同文である。三浦氏滅亡を『相州兵乱記』が永正十五年と記したことから、諸書が同年と記していることも分かる。

ただ、『豆相記』は異なる。

(前略)荒次郎不退終死之、早雲実檢彼級首、視未閉、故葬首於豆僧修禪寺、不成礼義之易、而僧詠左歌曰、(浦山シ二度覺ヌ又一睡一期ノヒマリアケホノ空)首忽瞑云云。(後略)

早雲の首実檢後、豆州の僧が修善寺に首を葬り、和歌(忠室禪師の和歌に似ている)を詠じている。

以上、①『相州兵乱記』から②『北條記』や、④『北條五代記』の二系統が刊行、この二書から各々類似本を出版、⑦『豆相記』のみが似てはいるが独自の記述である。ただ、いずれにも飛翔説はない。

表1 『北條記』諸本の三浦父子討死之事比較表

書名	成立年	梟首	飛翔説	手向け歌
①相州兵乱記	未詳	なし	なし	なし
②北條記(小田原記)	未詳	なし	なし	なし
③異本小田原記	未詳	なし	なし	なし
④北條五代記	寛永18(1641)	なし	なし	新井城で忠室禪師
⑤小田原北條記	寛文12(1672)	なし	なし	新井城で忠室禪師
⑥小田原盛衰記	未詳	なし	なし	新井城で忠室禪師
⑦豆相記	未詳	首実檢	なし	修善寺で伊豆の僧

『風土記稿』は何から記したのであろうか。それを知りたく、さらに飛翔説を追い求めた。

発見! 飛翔説

立木望隆氏が郷土誌『吾間の道』17・18合併号(昭和60年刊)で「御霊社居神社」と題して飛翔説を書いているのを見つけた。長文のため割愛するが出典が示

「されていいない。どうも立木氏は、『風土記稿』や諸書の記述を基に創作したように思えるが、結論として『風土記稿』の「梟首」が正しいとしている。ある日、当市立図書館地域資料室で、地方史研究『あずまえびす3・4合併号』の小題に、「三浦荒次郎死物狂ひ討死之事、付・荒次郎が首小田原へ飛来る事」とある一文に出会った。

静岡県小山町菅沼、岩田稲夫氏所蔵『相州小田原盛衰記』の「古文書解説いけやたけし(昭和51年2月21日)」とあるが、解説や所蔵経緯などは記していない。

(前略)(荒次郎は)今は是迄なり軍は存分ニしたり、いぎ最期せんとかの五尺八寸之刀首に当てて両手を懸てえいやくと首かき落し、此首眼を開き齒を鳴らし空へ飛上り、北条方の勢二火炎を吹かけ西北二飛び去りける。小田原山角信濃守が屋敷の松の枝二かり眼をいからし齒かみして往来の人をにらみ殺す事三三年に及びける。此度討手之大将ハ山角信濃守なりけるゆへ、此所へ飛来りよつて今に此処山角町という也。是二よつて天子へねがい上げて居神大明神と勧請すれども、其宗り止めざりけるか久野総世寺之和尚来り給ひて法子を以て首を撫て「うつとも夢ともツかぬ一祢なり 浮世の隙もあけぼのそら」と詠しければ、此首から

くと笑い眼をふさぎ地ニ落ける。今に居神大明神社ニあり。扱三浦新居之城、道寸討死の処ハ草も生すといふ。永正十五(十三)年七月十一日に落城しける。(後略)

まさに、これが「儲し話」であろう。賢明な読者はもうお気づきであろう、この「総世寺之和尚」の話は、『北條五代記』からの引用(盗作に近い)である。

当時は著作権などはない。作者(未詳)は梟首も総世寺の禪師が新井城に来た史料もないことに目をつけ、新井城を山角屋敷(後、居神明神社)に置き替えた飛翔説を思い付いたのであろう。

おそらく『風土記稿』はこれを調査して「儲し話」としたのであろう。その「儲し話」が除かれ飛翔説のみが一人歩きを始めた。それも、小田原に限ってであることを知って欲しい。三流作家?の盗作(当時は言わないが)、殆ど知られていない。

『神田明神史考』(平成4年、神田明神史考刊行会)は、平将門の首塚について、「首の飛ぶ伝説、首無し武者の伝説は、わが国の伝説の中にあつて将門公だけのもので特異なもの」とされている。事実は京都で獄門にかけられた首を将門公に有縁の者が密かに持ち去り、武蔵国豊島郡芝崎(現千代田区大手町)に葬った」という。義意の首飛翔説は、

小田原以外で知られる機会はなかった。一般的には『北條五代記』が知られ、特に『新横須賀市史』が収載しているのので、三浦・横須賀の人たちは居神神社の説明板に、?????と書かれている。

また、『国書総目録』や国立国会図書館の蔵書に『北條盛衰記』や『小田原盛衰記』(『小田原北条記』)はあるが、『相州小田原盛衰記』はない。おそらく、同書は刊本(刊行された本)ではないのだろう。因みに、『同書』写本が「小田原有信会文庫」にあった。しかし、奥書きに「嘉永元戊申年写し」とあるが、何故かその後の部分が破られ欠落している。故意か偶然か、何かしら不信の念を抱かせられる。

この書籍の成立年代も判明しないが、『風土記稿』が天保十二年(一八四二)の成立であるから、江戸時代中期十九世紀初め頃と考えられようか。

何故、総世寺住職か?

では『北條五代記』は何故、総世寺住職忠室を登場させたのであろうか。『風土記稿』の久野村総世寺の項に「明應三年(一四九四)、義同が養父時高と不和になり、総世寺に逃げ込み智海宗哲の弟子になった。義同の妻は開基大森寄栖庵の妹」とあり、『北條五代記』は、このことを「三浦介道寸父子滅亡の事」の前に記している。

作者三浦浄心は、『相州兵乱記』の新井城で自刃した義意の怨霊話(荒井ノ地ニ亡霊アレテ、往来ノ人ノウツ、二見ユ。言葉ヲカハスコト度々ナリトカヤ)から、義意を成仏させるために「手向け歌」を思いついた。その際、三浦氏同様大森氏も北條氏に滅ぼされていることから、両家に縁のある総世寺に思い至り、当時の住職・四世忠室を登場させたのであろう。

『北條五代記』の刊行は、義意自刃の百二十五年後である。因みに『豆相記』は、北條氏馴染みの修善寺で豆州の僧としていた。同書の著者・成立年代も判明していないが、成立が『北條五代記』よりも早ければ、三浦浄心は『豆相記』を脚色したことも考えられる。このことは『相州小田原盛衰記』にも言えることであるが…。

それは兎も角、自領に敵將を祀る話は他にもあるだろうか。

自領に敵將を祀る

正平三年/貞和四年(一三三八)一月、南朝方の楠正行軍が北上して大坂の四條畷で足利尊氏家臣高師直軍と激突した。結果は圧倒的兵力の足利方に、楠正行と弟の正時は自決している。

この時、楠正成の甥(楠正季五男で末子)の和田(にぎた)賢秀は武勇の誉れ高く果敢に敵陣に潜入したが、かつて味方であった湯浅本宮



和田源秀戦死の墓(四條畷神社)

太郎左衛門と遭遇し、多勢に無勢、湯浅の首に噛みつき相討ちで共に戦死した。土地の人々は賢秀の霊を齒嚙様と称したが、齒神様に転じて祀られたと伝承されている。また、別の民話には噛みついた話はなく、首改めの時の形相が余りに無念で恐ろしい表情であったため、実検役人が夜ごとうなされ、死去した話もある。賢秀は源秀とも称し、現在の墓碑は「和田源秀戦死之墓」(大阪府四條畷市南野)とあり、四條畷神社の管理下にある。次に、『筑前風土記』収載の話を要約する。天正九年(一五八二)秋、筑前国の秋月種実が筑後国生葉郡

に侵攻した。これに対して守護職大友宗麟も筑後国を守るべく軍勢を差し向け、原鶴(福岡県杷木町)合戦に発展した。

この時、豊後(大友)勢の野上上野入道一閑は、白柄の長刀で秋月勢を薙ぎ倒すこと草を刈るが如し、これに秋月の士二十二歳の美少年三奈木弥平次が立ち向かうと、種実は横内七郎左衛門と木所(きと)玄蕃を加勢させ、野上を討ち取ってしまう。これを見た豊後の兵は、弥平次と横内・木所三名を敵討ちにしていく。こうしたことから老松神社(福岡県朝倉市)は、敵将野上入道一閑を祀っている。

このことを同神社宮司梶原明彦氏は、「敵将を祀る行為は、如何に敵であつても、その軍功に敬意を表し礼儀を尽くす日本人魂である」と言われている。(老松神社と野上入道一閑について)

一般的に、神社や寺院に人を祀るのは崇敬される人物で、その人にあやかり、またその加護を期待するからであろう。一方、恨みや崇りが及ぶことを懼れ、その人物の成仏・鎮護を願って祀ることもある。多くは前者で、後者はそのことを積極的に記すことはなく、表に出ることは少ない。

また、「梟首」は江戸時代になると「獄門」と称され犯罪人に対する刑罰となるが、中世の「梟首」

は「敵ながら天晴れ」とする畏敬の念が含まれていると考えられる。

以上、三浦義意を含め敵将であるが自領に祀られた三者に共通するのは、抜群に武勇に優れていたことである。とすると、敵味方に限らず尊敬され畏敬の念で祀られたと言えよう。しかしながら、善意と和田賢秀は死後の形相の凄まじさから怨念も記しており、崇りを懼れて祀ったとも考えられる。

北條氏綱の創建と神輿巡行
次に示す『異本塔寺長帳』(国立公文書館蔵)の記述が興味深い。

(永正)十三年丙子(中略)北條宗雲(早雲)并氏綱三浦道寸攻(七月十四日)三荒井城落ト云ハ誤也、道寸父子討死ハ十五年戊寅也)十五年戊寅七月十一日(三浦道寸并荒次郎義基、北條宗雲攻荒井城□也)十七年庚辰三浦荒次郎義基首ヲ於小田原威神(居神)明神ト祭ル

この記述から永正十七年(一五二〇)が言えるであろう。その翌年から祭りが初まったことになる。

早雲が家訓として残したとされる『早雲寺殿廿二箇條』は、「第一に神仏を信じ奉るべきこと」を記している。早雲は義意自刃三年後の永正十六年に他界し、一周忌に当たる翌年、山角信濃守の屋敷に居神明神社が創建されている。北條氏の寄進であり、氏綱の積極的意向が窺える。

早雲は大森氏を追うと、十一歳の氏綱に小田原を任せた。この時から氏綱は町づくりを始め、父早雲他界の時は三十三歳、ほぼ町づくりは終えていたであろう。その後大永元年に湯本早雲寺を建立し、鎌倉鶴岡八幡宮再建にも着手。翌二年、相模国一之宮(寒川神社)と同三年に箱根権現社を再建し、同九年鶴岡八幡宮再建を終えている。大永時代は領外での活動が際立っている。創建翌年の大永元年の居神明神社祭礼は、町づくりの完成祝いでも小田原最初の祭りとも考えられる(北條家氏神の松原明神社は、十数年後の天文中の勧請)。「風土記稿」に神輿巡行は「馬出門で祈禱」とあり、この巡行は特別である。

同社は山角町と板橋村の鎮守とある。二町村は、江戸時代は上方見附で区切られていた。や、もすれば対立しがちな町方と郷方村方の仲介役を同社は果たしていたの

ではないだろうか。『おだわら・ふるさとの記憶』(平成九年刊)で板橋在住の三宅金次郎氏が話している。

お祭りといえば、居神(神社)さんは板橋の全体と、南町の半分(山角町)が氏子で、合同でお祭りをしているんです。五月五日後に、祭ついで三浦荒次郎のお墓参りにいくんです。バス一台で、三浦の油壺にある荒次郎のお墓まで、毎年お参りに行つてるんです。お祭りが無事に終わった報告と、氏子の皆さんの安全な生活を祈願してくるんです。昔から続いているお墓参りなんです。

後記

現在、居神神社にある当市説明板は、横書きで英訳もついているが、偶々、私が平成十六年に撮影した縦書きの旧説明板に「創建伝説」はなく、大永元年に始まった祭礼を記していた。その祭礼行事を削除して「創建伝説」に改めたのである。当市内で最も古くて今も継続している祭礼を削除してまで記す話題とは思えない。

飛翔説は「面白がれる話」ではあるが、結果的に「盗作」を伝説にしていることになる。一市民として、三浦氏に関係する人たちに不快な思いをさせていないか、当市の歴史認識の程度も問われかねないことも懸念される。苦言ついでに、当市?史跡説明板は執筆箇所

を記していない。歴史の町を標榜するわりには何とも恥ずかしい。

『風土記稿』は、義意自刃の地・三浦郡衣笠庄小網代村に「新井古城」と「義士塚」を記している。義士塚は現存し、地元民によって北條氏家臣四氏が祀られている。

○義士塚 外郭引橋の邊にあり、北條早雲の家士四人の墓なり、相傳ふ荒次郎義意最後の奮戦に敵兵辟易して敢て近くものなし、特に彼四人義意を目がけ討て懸る義意たゞ一刀に打果さんとす、道寸其勇敢を憐て放免せしむ、落城の後道寸の芳志を感じ爰に來て自盡す、故に此名ありと云

(注) 小田原有信会文庫の『相州小田原盛衰記』(写)と『あずまえびす』は、小田原市立図書館地域資料室にある。

新会員紹介

名前(敬称略)	住所
神田 耕治	小田原市蓮正寺
深野 彰	小田原市曾比

旅のつれづれ俳句日記

劍持芳枝

今回も大分以前の旅日記となりますが、ある年の十一月、秋も日増しに深くなる頃、友人の会社の寿会バス旅行に誘われて参加することになった。東名高速をひた走り富士川サービシアreaで休憩、富士山の見事な姿がはつきりと見られた。浜名湖でも休憩し十一時半には蒲郡に着き、ファンタジー館で昼食となった。食後は館内を見学し土産物などを見て歩いた。午後は吉良上野介の菩提寺華藏寺へ。和尚さんの法話を聞きお庭を拝見した。NHKのドラマ「元祿繚乱」ゆかりの地なので賑わっているらしい。そのあとガン封じの寺で知られる無量寺へ、本堂に上がって法話を聞き、奥にある中国の石窟寺院をモデルにした千仏洞めぐりをした。何か異様な感じがした。ガンに効くと云ういろいろな飲み物や食べ物を売っていた。

秋冷や寺の晚鐘遠く聞く

夕方、西浦温泉銀波荘に着いた。三河湾に面して大きなホテルが重なるように連立していた。波の静かな海が目の前にひろがっていた。部屋に通され早速お茶を飲みながらおしゃべりが始まった。六時からの宴会は大広間で実に賑やかだった。舞台ではカラオケが好きな人達は次々と歌を楽しんでいた。私達は八時過ぎに退散した。露天風呂に入り旅の疲れを癒やした。

虫の音や灯りし宿の非常口

翌朝五時に目が覚め部屋から日の出が拝めるといので、何となくうつらうつらしていたが、六時近くにはそろそろ着替えはじめた、六時二十分頃東の空が真赤に染められて太陽が見えはじめると、素晴らしい光景に皆さんから感嘆の声が洩れた。朝食を美味しくいただき、八時三十分宿を出発、五分くらいでちくわ工場へ。工場を見学し売店でチーズちくわをおみやげに買った。

岡崎市に入ると立派な岡崎城を右に見て岡崎八丁味噌工場へ。此所でも見学し売店で田楽のたれや鯛味噌を買った。一畑山薬師寺は立派な大きな寺だった。お薬師さまの霊験あらたかな法話を聞き入った。小さな穴から薬師如来のお姿が見える紫色の数珠を買った。最後は「思い出市」と云う店で休憩した。

東名高速を走る帰りのバスでは、疲れからか眠くなってしまった。天候に恵まれた季節外れの暖かな日々で、楽しい旅が出来て本当に幸せだった

雪村周継と小田原

深野 彰

はじめに

「雪村」の絵の実物を初めて見たのは、平成二十七年七月、京都国立博物館・平成知新館の中世絵画コーナーで開催されていた「個性の画家・雪村展」であった。室町時代から戦国時代の禅僧・雪村の絵は、画題と云い、登場人物の表情と云い、とにかく面白い。茨城の出身の雪村は、箱根の早雲寺に滞在したことがあると云う。雪村と小田原の関係を探ってみよう。

一 雪舟の水墨画

室町時代は、茶道、華道、連歌、能楽など、日本の伝統文化と呼ばれる芸術文化が華開いた時代であった。日本文化の源流となった室町時代に、絵画史上においても大きな変化が生まれた。それは「水墨画」とか「禅画」と呼ばれる絵画の隆盛である。水墨画はもともと中国が発祥の墨を用いた絵画である。墨の黒一色のみで、風景画や人物画を表現豊かに描く。その水墨画の世界で画聖と呼ばれた「雪舟」をまず取り上げよう。

雪舟等楊(せつしゅうとうよう)は一四二〇年(応永二七)に備中国(現・岡山県西部)に生まれ、京の相国寺で臨済禅を学んだ。一四五四年(宝徳六)に周防国の守護大名大内教弘(おおうち のりひろ)に招かれて山口へ移った。山口で画業に励んでいたが、一四六七年(応仁元年、明の成化三)に大内氏が仕立てた遣明船に乗って中国へ渡り、中国浙江省寧波市街の東方にある「四明天童寺」へ入山した。天童寺は現在でも参拝者が絶えない古刹である。雪舟は禅の修行に励み、「天童寺禅班第一座」と称された。第一座とは「首座」(しゅそ)のことで、禅堂での修行指導にあたる者である。人望が高く修行が深い僧が選ばれたと云う。

雪舟は寧波到着後、北京へ行き明王朝の憲宗皇帝に謁見した。皇帝から紫禁城の礼部院中堂の壁画を描くように命じられたが、完成した壁画を見た憲宗皇帝や臣下たちは、その出来栄えに感嘆したそう。雪舟の名は、一躍中国中に広まったのである。雪舟の画力は、中国に渡る前から既に中国画壇を唸らせるレベルであった

と云えよう。北京への旅は長江を遡り大運河を北進したが、その川筋で沿岸の風景をスケッチして「唐土勝景図巻」を描いた。雪舟にとつての山水画とは、日本にいて夢想する世界ではなく、実見聞に基づくりアルな風景であった。江南地方では、雪舟は旅を通して山水風景を実見した。天童寺での修行のかたわら、浙江省の山河や名刹を巡って古寺や自然の風景をスケッチした。雪舟は太湖石のような丸い穴が開いている岩を描いている。中国の寺院や邸宅では太湖石が庭園造りの重要な要素になっていたから、雪舟はそのような庭園も見ただろう。そして、古刹に所蔵されている名画を模写して水墨画の技法を研究し学んだのである。

水墨画の技法を身に付けて帰国した雪舟は、西国各地を巡った後、山口の雲谷庵に居を定めて数々の水墨画の名作を描いた。現在、雪舟の水墨画は六点が国宝に指定されている。一人の画家の作品がこれほど国宝に指定される例は他にはない。中でも、「秋冬山水図」は雪舟の水墨画における最高傑作である。迷いなく墨線で引かれた断崖は、垂直に切り立って天へと消えていき、どこまで高く聳えている。雪が積もる山や楼閣は、冬の景色の中に静かに佇んでいる。中国の山水画から学びなが

ら、独自の空間構成、輪郭線の強調と岩肌表現など、雪舟様式を確立した作品と云えよう。自らの自然観を表現した水墨画を描き、日本の水墨画に新境地を切り拓いたのである。

日本の水墨画を確立した雪舟であったが、その後を引き継ぐ弟子はおらず、室町水墨画においてただ一人そびえ立つ独立峰の観を呈している。雪舟は一五〇六年(永正三)に八十七歳で没したと云われている。

二 雪村周継

雪舟の名は世界的にも知れ渡っているが、「雪村周継(せつそんしゅうけい)」の名となると、知らない人の方が圧倒的に多いだろう。日本史の教科書に記載されることもなく、美術史でも取り上げられる書物は少ない。そもそも、雪村という人がどういう人であったかの史料が極めて少ないので、略歴の詳細が分からないのである。にもかかわらず、雪村の作品は国内外各地に百点を越えて現存しているのが不思議である。雪村の研究は昭和になってから進み、現在ではその生涯についての概要を知ることができるようになった。

雪村は常州部垂(へたれ)(現・茨城県常陸大宮市)に生まれたとされている。雪村の生年は一五〇四年

(永正元年)や一四九二年(明応元年)など諸説ある。一五〇四年生まれとすると、その二年後に雪舟は永寂したことになる。一方、一四九二年生まれとすると、雪村と雪舟は十四年間生涯が重なる。どちらにしても、二人の関係では、関東から出ることのなかった雪村が本州の西端に居た雪舟に直接会うことはあり得ず、ましてや水墨画の指導を受ける機会があったはずもない。ただ、雪村の名の「雪」は雪舟から採ったと伝わるから、雪村は雪舟を敬慕し、その画法についても深く研究したことは間違いないであろう。

雪村は幼くして禅僧となり、部垂近くの現・常陸大宮市にある正宗寺(しょうしゅうじ)で修行をした。その後、関東地方各地を遍歴したが、雪村の活動拠点は生涯に亘って北関東であった。戦国時代の常陸国は、守護大名佐竹氏が支配していた。雪村の出身も佐竹氏の一族であったとする説が有力である。佐竹氏は当主・佐竹義人(さたけ よしひと)が常陸太田に絵画文化をもたらしたと云われ、佐竹家は代々絵画に造詣が深い大名であった。江戸時代になると秋田藩主へ転封されたが、江戸中期の藩主であった佐竹曙山(さたけしよざん)は、日本における西洋絵画の先駆けである「秋田蘭画」の作者としてその名が知られている。

室町・戦国時代の禅寺は、守護大名や戦国大名から篤い庇護を受けていた。正宗寺もまた佐竹氏の庇護の下にあった。雪村の修行をした正宗寺は佐竹氏の菩提寺であったから、絵画への関心も高かったのも頷ける話である。中国でも日本でも当時の禅寺では、その禅思想を表現するために絵画、特に水墨画が盛んに描かれた。中国から渡って来た水墨画も、大名たちから寄進を受けて全国の禅寺に納められた。公家でない人でも禅僧となつて禅寺に入れば、中国の名品を觀賞したり模写したりすることができた。そのような禅寺に雪村は入門したのである。雪村は禅僧をめざすと云うよりも、絵画を学ぶために正宗寺に入ったのだという説がある。根っから絵を描くことが好きだったのだろう。雪村は四十五歳頃に南関東を訪れ、鎌倉から小田原へと滞在した。小田原では早雲寺に入り、修行をするともに絵画制作にも力を入れたと云う。

三 雪村と早雲寺

箱根山の麓の箱根湯本に構える早雲寺は、一五二二年(大永元年)二代目北条氏綱が、父・伊勢盛時(北条早雲)を用うために創建された。伊勢盛時は駿府・今川家の家督相続を調停した後、再び上洛して一四八三年(文明十五)から一四

八七年(長享元年)まで將軍足利義尚の申次衆を務めながら、大徳寺に通つて禅の修行をした。それ以降、北条家は大徳寺と永く縁を結ぶことになった。盛時(早庵宗瑞)は一五一九年(永正十)に、大徳寺八十三世住持であつた以天宗清(いてんそうしん)を、居城のある韮山へ招いた。その年に宗瑞は韮山城で没した。

宗瑞の没後、嫡男氏綱は早雲寺を創建して以天禅師を開山とした。氏綱は早雲寺へ北条家の領地や門前地の箱根湯本など多額の寄進を行っている。一五四二年(天文十二)に後奈良天皇より下知された勅願所の論旨が早雲寺に遺されている。「正宗大隆禅師」の禅師号を賜つた以天禅師の名声は、大徳寺関東龍泉派(りょうせんは)として大いに広まり、多くの修行僧が以天禅師を慕つて早雲寺に集まつて来たと云う。

以天禅師の後も、早雲寺の二世大室宗観(だいつそうせき)が大徳寺九十五世、三世松喬宗佐(しようせい)が九十九世、四世南岑宗菊(なんしんそうきく)が百十世、五世明叟宗普(めいそうそうふ)は大徳寺百十三

世となつていく。このように、早雲寺と大徳寺は、末寺と本山という結びつき以上の強い関係があり、大徳寺の住持を輩出する名刹として位置付けられていたのである。

当時の禅寺は禅の修行の場であると同時に、禅文化の中心であった。早雲寺は大徳寺の先進的な禅文化を小田原に伝えた。早雲寺には数多くの寺宝の絵画が遺されている。

雪村は鎌倉を巡つた後、一五五〇年(天文十九)に箱根の早雲寺へ



(写真1) 伝雪村筆「三羅漢図」(早雲寺蔵)

入った。北条氏は鎌倉の禅寺が所蔵した数多くの中国の水墨画の名品を早雲寺へ寄進したと云われている。雪村は二年間小田原地方に留まり、その間に早雲寺住持の以天禅師の肖像画を描いた。雪村が去った二年後の一五五四年(天文二十三)に以天禅師は入寂した。雪村が二年と云う短い年月であつても早雲寺に留まつたのは、早雲寺が所蔵する名品を見るためであつたと容易に想像がつく。

雪村の実力は既に広まつていたと思われ、雪村が望めば自由に閲覧したり、模写したりすることは出来たはずである。更に、文化に高い関心を持っていた北条氏は名画の収集に熱心で、二代北条氏綱の時代から中国・南宋画家の牧谿(もつがい)、玉潤(ぎよくかん)の「蕭湘八景図」、林庭珪(りんていけい)・周季常(しゅうきじょう)の「五百羅漢図」などが北条家に蒐集され、早雲寺に寄進されていた。四代北条氏政は雪村に帰依したと云うから、北条家所蔵の貴重な中国名画も雪村は見る事が叶い、その画法を直接研究したとだろう。

雪舟が西の雄の大内氏から庇護を受けたように、雪村もまた東の雄の北条氏から庇護を受けたのである。雪村の「釈迦羅漢図」は、「五百羅漢図」を手本として制作された推察されている。どち

らも、羅漢たちが上を見上げている姿で描かれている。

現在、早雲寺には雪村筆と伝わる「三羅漢図」(写真1)が遺されている。早雲寺・寺宝展では、本堂「衣鉢の間」の床の間に掛けられていた。研究者によつては雪村筆ではないとしているが、太い線で滑らかに描かれた衣の襷など雪村らしい筆のように見える。早雲寺に遺されている雪村の関係は、この一点のみである。

小田原攻めで豊臣秀吉は早雲寺を本陣としたが、石垣山一夜城が完成すると本陣を移して早雲寺を焼き払ってしまった。七堂伽藍と多数の塔頭を誇つた早雲寺は灰燼に帰してしまつたのである。このとき早雲寺の住持は五世明叟宗普(めいそうそうしん)であつたが、弟子たちと小田原城に籠城した。早雲寺にあつた北条家の位牌や寺宝は、後に住持となつた菊径宗存(きくけいそうぞん)によつて一部が持ち出され、小机領へ避難した。雪村が描いた以天宗清の肖像画も、このとき大徳寺に移されたようだ。現在も大徳寺の所蔵となつたままである。

小田原攻めで北条家が滅びた結果、ほとんどの寺宝や北条家の宝物は、勝者・秀吉によつて大阪へ持ち去られてしまつた。ところが、現在それらの北条家所蔵や早雲寺の宝物は、徳川美術館など徳

川家にゆかりのある場所に所蔵されている。徳川家が豊臣家を滅ぼした時に、豊臣家の宝物を我が物としたのだらう。宝物とは流転の運命が定められている。その後の早雲寺は、江戸時代に入つた一六二七年(寛永四)、菊径宗存によつてようやく再建され、避難してゐた一部の寺宝が早雲寺に戻ることができたのである。

四 雪村の水墨画

雪村がどのようにして画技を身に付けたのかは、はっきりしてゐない。雪村研究者たちは、北関東地方に遺された雪村の作品から、その画業の変遷を辿つて推測する試みを続けている。

雪村の最も有名な絵の一つは、三幅対の「琴高群仙図(きんこうぐんせんず)」(写真2)である。琴高仙人は紀元前五世紀から紀元前三世紀頃の中国の「趙」の人で、

仙術を極めて仙人となつたと云う。或る日、琴高仙人は龍の子を捕まえてくるから待っていると弟子たちに言つて、江蘇

省の湖水に潜つた。弟子たちが湖の畔で待っていると、琴高仙人が赤い鯉に乗つて水面から躍り出てきた。鯉は龍の子と云われるので、琴高仙人は水中で巨大な鯉を捕まえてきたのである。この三幅対は、まさしくその瞬間を描いている。中幅には、髭を手綱代わりに握つて鯉に馬乗りになつた琴高仙人が描かれている。仙人に馬乗りされて、びっくりしたように鯉は目玉をまん丸に見開き、鯉の尾ひれは大きく湾曲して水面を激しく叩いて波濤のような水し



(写真2) 雪村筆:「琴高群仙図」(京都国立博物館所蔵)

ぶきを上げています。仙人の結髪や腰紐が飛躍する勢いにたなびき、飄々と鯉に跨る仙人に躍動感を与えている。まるで荒馬を巧みに御するロデオのようだ。右幅には、三人の弟子と女性と童子が一人ずつ、五人が琴高仙人を見上げている。左幅では、四人の弟子と童子が一人、やはり五人の驚いている様子が描かれている。左幅の手前の弟子の袖は、中幅の水しぶきに呼応するかのようには、風に煽られてたなびいている。琴高仙人の横顔は、鯉に跨る緊張感はあるが、どこか涼しげな表情である。言うことを聞かない龍の子を相手に超然としているように見える。琴高は真の仙人であることが、この横顔から感じられるのである。



(写真3)「呂洞賓図」
『水墨画の巨匠・第二巻／雪村』
(講談社刊)より引用

の高さより少し高い位置に架けられていたためだったのか、それにしても、絵の中に

一体とな

った不思議な体験だった。

雪村の絵は、どこかユーモラスである。「呂洞賓図(ろどうひんず)」(写真3)は、龍の頭に乗った仙人呂洞賓が龍の化身と禅問答をしている様子を描いている。横目がちの龍は、おどけた表情で少しも恐ろしくない。呂洞賓は頭を大きくのけ反って天上の龍と対峙している。手の指先は不自然に曲がっている。顎髭や衣は風に激しく煽られて、呂洞賓は嵐の中に身を置いていて、その足の指先は強く折り曲げられて、龍の頭をしっかりと掴んでいる。禅問答の様子をこれほど激しく、それでいて微笑ましく描いてしまうところが雪村である。

雪村の絵の中で最も好きな絵は、と問われれば、私は「列子図(れっしず)」(写真4)を選ぶだろう。列子とは、中国の春秋時代にいた「列御寇(れつぎょこう)」の尊称で、河南鄭州の道家である。列子は心身を空にして天地大自

然の法と一体となり、風にのって大空を飛行する仙術を会得したと云う。背景にひかれた薄墨と下部にある笹、そして、たなびく衣が右上方に向かっていて、その風によって列子は軽やかに宙に浮いている。衣の線の柔らかさは雪村画のおおらかさを如何なく發揮している。この列子もまた上空を見上げている。わずかに背中を丸めて更に高みをめざす列子は、その求道の姿を観る者に自ずと伝えている。飄然として大自然と一体化した列子は、雪村が求める己の姿なのかもしれない。「琴高群仙図」も「列子図」も小田原時代に描かれた。雪村が描いた人物像からは、小田原の北条文化は自由闊達な空気に満ちていたと想像できるであろう。

五 雪村と小田原狩野派

雪村と同時代の小田原には、「小田原狩野派」と呼ばれる絵師群がいた。狩野派と言えば、室町幕府の御用絵師となった狩野正



(写真4)「列子図」
『水墨画の巨匠・第二巻／雪村』(講談社刊)より引用

信を祖とする画家集団である。信長、秀吉、徳川將軍家と、狩野家代々は時の権力者と結びついて城郭、内裏、寺院の雄渾な障壁画を描いたことで有名である。その狩野派の一派が、戦国時代の小田原で活躍していた。文化に深い造詣をもった代々の北条氏は、絵画においても狩野派と積極的な関わりを持った。狩野元信に学んだとされる絵師が「狩野玉楽(かのうぎょくらく)」と「前島宗祐(まえじまそうゆう)」である。二人とも生没年さえ不詳で、以前は同一人物とされたが、現在では別人と考えられている。その経歴は謎に包まれているが、北条家に仕えた御用絵師だったようだ。残されている画風からは、狩野元信から学んだ可能性が極めて高いとされる。早雲寺の寺宝の中に、戦国時代に描かれた北条早雲、北条氏綱、北条氏康の北条三代の三幅対の肖像画がある。中央の早雲像の画面は暗く、僧体の早雲は禅の道を進む求道者のようである。それに



(写真5)「枯蘆に雪図」
『水墨画の巨匠・第二巻／雪村』(講談社刊)より引用

対して、氏康像の画面は極めて明るく、線描も力強く描かれて関東の覇者の堂々とした容貌が表われている。この三幅の違いを、描いた時代の変化を、即ち、関東絵画に狩野派の影響が入り込んだ結果と分析する研究者もいて、三番目に描かれた氏康像を描いた絵師は狩野玉楽の可能性が有るとの指摘もある。

一方、室町時代から戦国時代にかけて、鎌倉では「賢江祥啓(けんこうしょうけい)」などの絵師たちが活躍していた。祥啓は京都の新しい様式を関東に伝えて、関東画壇の指導的な役割を果たした。祥啓の影響を受けた関東の絵師は多く、祥啓派と呼ばれた。祥啓は雪村より一世代前の人であるから雪村もまた祥啓を研究し、その影響を受けたと考えられている。北条時代に関東地方には、各地に独自の世界を描いた絵師たちが

いた。小田原狩野派もその一つである。それらの絵師たちは互いに学び、影響し合っていた。群雄割拠の戦国時代のうちに、絵師たちも関東各地に独立峰のごとく独自の画技を磨いていた。その中でも、雪村はこの派に分類されることもない独自の境地を切り拓いた特別な存在であったと云える。勿論、小田原地方在住の二年間には、小田原狩野派との交流もあつたであろうし、北条氏が所蔵する中国絵画の名品を目にして大きな影響も受けたであろう。雪村や小田原狩野派も含め、戦国時代に活躍した関東の絵師たちが描いた水墨画を「関東水墨画」と呼んでいる。関東水墨画の流れは、京都の狩野派のように集束することも系統化・家業化されることもなく、北条氏が滅びるとともに消えてしまった。

中国南宋絵画、京都の狩野派などの画法を真摯に学び、関東水墨画からも多くを吸収した雪村もまた、その技を引き継ぐ弟子を持たず、あくまで一禅僧として孤高

に、絵師たちがいた。小田原狩野派もその一つである。それらの絵師たちは互いに学び、影響し合っていた。群雄割拠の戦国時代のうちに、絵師たちも関東各地に独立峰のごとく独自の画技を磨いていた。その中でも、雪村はこの派に分類されることもない独自の境地を切り拓いた特別な存在であったと云える。勿論、小田原地方在住の二年間には、小田原狩野派との交流もあつたであろうし、北条氏が所蔵する中国絵画の名品を目にして大きな影響も受けたであろう。雪村や小田原狩野派も含め、戦国時代に活躍した関東の絵師たちが描いた水墨画を「関東水墨画」と呼んでいる。関東水墨画の流れは、京都の狩野派のように集束することも系統化・家業化されることもなく、北条氏が滅びるとともに消えてしまった。

を守つたのである。小田原狩野派は、一般的にはまだ十分に知られていない存在である。今後の小田原狩野派と雪村との関係の研究に期待したい。

六 雪村の晩年

南関東の旅から北関東へ戻つた雪村は、会津に腰を落ち着けた。会津に居た雪村は蘆名(あしな)氏の庇護を受けて、充実した制作活動を迎えた。北条氏政の帰依を受けた小田原での名画研究が、豊かな糧となつたのだろう。「四季山水図屏風」の大作や「呂洞賓図」など雪村の代表的傑作は、この時期に生み出されたのである。

晩年の七十歳頃、福島県の三春に「雪村庵」を構えて隠棲したと云う。雪村の筆は冴えわたり、「枯蘆に雪図」(写真5)などは、ほとんど抽象画と受け取れるほど、高い精神性の境地に達しているように見える。

雪村は三春の里で絵師としての生涯を終えた。没年は不明で、雪舟と同様にその墓の所在も知れない。

(参考文献)

- ・瀬戸内寂聴、林進「雪村」水墨画の巨匠第二巻、講談社、一九九五年
- ・山下裕二監修「雪村展・戦

いろいろ
にみる
小田原

早雲公とともに
城下町を
つくった老舗

深野彰 編著

今、気付かずにきた
歴史の舞台に立つ!

小和田哲男氏絶賛!

京都一森町(静岡版) - 小田原と、
600年もの長きにわたつたつながり「縁」、それが明らかとなる

- ・国時代のスーパーエキセントリック」千葉市美術館、二〇〇二年
 - ・赤澤英二「雪村周継」ミネルヴァ書房、二〇〇八年
 - ・小川智二「雪村・生涯と作品」東京美術、二〇〇七年
 - ・中村溪男「雪村と関東水墨画」日本の美術第六三三号、一九七一年
 - ・中島純司「水墨画―祥啓と雪村」日本の美術第三三七号、一九九四年
 - ・「雪村―常陸からの出発」茨城県立歴史館、一九九二年
- (著者略歴)
- 一九四九年東京生まれ。早稲田大学大学院理工学研究科修士課程修了。二〇〇三年〜二〇〇六年、中国江蘇省蘇州市駐在。現在、小田原市文化振興ビジョン推進委員会委員、小田原市社会教育委員会委員、小田原市文化レポーター等。著書に『蘇州通信』(二〇一〇年)、『いろいろに見る小田原』(二〇一六年) いずれも(株)新評論刊。

吉田島にあった「喜楽座」

藤平 初江

はじめに

この六月に行われた「第三回小田原・足柄の歴史と文化」合同展示会での小田原史談会のテーマは、「小田原および小田原周辺の映画館と芝居小屋の歴史」でした。

その折、開成町吉田島に生まれ住む私にも取材調査の声がかかりました。そこで、わが河原町地区の児童公園になっている所に「喜楽座」という芝居小屋があったこと、もしかして足柄上郡では初めての小屋ではないか、そして当時東海道本線であった松田駅開業が生んだ河原町地区の誕生と賑わい、先祖が神事舞太夫であったという知り合いの家の古文書の話、また、私の祖父が道具師で小田原寺町出身と聞いていたので、もしかして小田原の桐座とも何か関わりがあったのではないかと等々、とりとめのない話をしました。

史談会の取材にお応えはしたものの、何か足りなかったような気がして、また不確かな話もしたようで落ち着かないものが

ありました。

そこで道具師であったと言う祖父のことから調べてみようと思いたちました。

道具師「祖父・石井大治郎」

私の母方の祖父の名は石井大治郎と云います。明治十二年(一八七九)に小田原の萩窪村に生まれ、同三十七年(一九〇四)二十五歳の時、ここ吉田島に移り来ました。ちよつと男前だったようですが、「飲む、打つ、買う」の三拍子揃った男で、祖母はずいぶん苦労したそうです。

震災後の大正十四年(一九二五)の秋、心臓麻痺で亡くなりました。寺が遠いので、近所の方々に棺を担いでいただき、寺町の大長院へと向かった時のこと、途中、曾比の稲荷森まで来て、お棺から足が出てしまったそうです。母からその噂はよく聞いたのですが、幼かった母は実際、留守勝ちであった祖父のことは余り知らないようで、私も訊くこともせずに来てしまいました。



(カット・田中豊)

「道具師」と聞いても古道具屋のことかと、ずつと思つていくくらいです。

今回調べてみて驚いたのは、石井富之助氏の「小田原劇場物語(六)」「小田原史談」(一四〇号)でした。物語(一)から読み継ぎ、物語(六)の後半は桐座の道具方の話になりました。貴重な「桐座記録」をお書きになった大道具師、中川金太郎・初太郎父子が紹介され、続いて小田原周辺の座の道具方も含めた仕事仲間の名が掲げられています。その二十一人の道具師の中に、祖父・石井大治郎の名があったのです！大治郎が大次郎と書かれていましたが、そうした違いはママあることです。更に明治三十年代、県下にある劇場の名も掲げていて、当地の芝居小屋、喜楽座(吉田島)もありました。なんと、なんと、やっぱり祖父は喜楽座の道具師だったかも？これは急ぎ「桐座記録」を読まなくては：

小田原市立図書館蔵の「桐座記録」を閲覧させていただきました。まずは石井富之助氏書写のその自在な運筆に脱帽。読み始めて程なく喜楽座の記述はありました。その記録によりますと、明治三十二年(一八九九)二月、吉田島の喜楽座が開場、座主は井上・箕島外に二人、興行演目は「碁盤忠信」、「菅原伝授手習鑑・寺子屋の段」、「十八番勧進帳」の三つで、市川雀之助、市川芝尾、市川嶋三郎の一座でした。大道具方は中川初太郎、佐野米吉、小道具は市兵衛。この二月の興行は、山北の「山北座」新築と同時に興行で、道具方は掛け持ちで仕事をすると記されています。

次いで明治三十五年(一九〇二)一月の喜楽座興行は、請元が田中一郎、演目は「時今雨下知桔梗旗揚」、「神霊矢口渡」の二つ、役者は中嶋博幸、坂東舞鶴、市川団之助、松本錦時、大道具方は中川初太郎、佐野米吉、石井大治郎、瀬戸琴次となっています。

そして、明治三十七年(一九〇四)の記録に、石井大治郎が喜楽座の大道具師になったことが、はっきり記されていました。喜楽座についての記録はここまででした。

喜楽座と街の賑わい

明治二十二年(一八八九)二月、

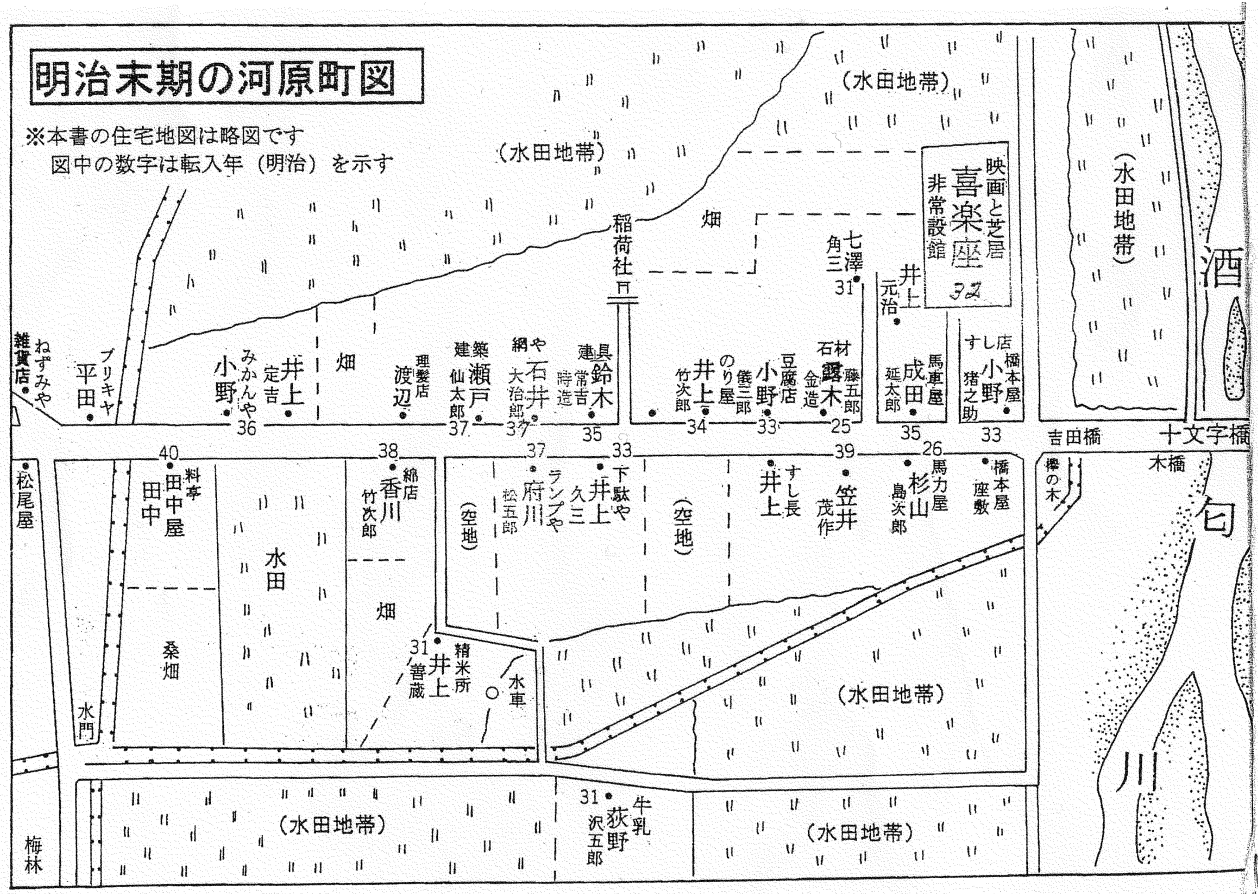


図1. 明治末期の河原町図(香川二郎著『河原町の今昔誌』所収)

東海道本線(現御殿場線)の松田駅が開業しました。その開業に合わせて道了尊詣りの客を運ぶため、更には足柄の開発を見据えた道作りが既に始められていました。旧来の酒匂川十文字の渡しは廃止され、橋銭をとって車馬や人を通す長い木橋に替わりました。十文字橋と名付けられたその橋の西の袂に喜楽座が出来たのは明治三十年頃かと思われまます。

石屋、馬力屋などまだ数軒が建つばかりの新道は、洪水時には遊水地となり永く人が住まなかつた河原辺で、喜楽座の大きな建物は近隣の人の好奇と期待を集めていたことでしょう。後に喜楽座の客を見込んで、鮎屋、馬車屋、下駄屋など橋から順に家が建ち始めて、道沿いは次第に一つの集落を成してきました。

図1はこの時の様子を示したものです。図中の数字は転入した明治の年号で、喜楽座開場の明治三十二年以降急速に街が出来て行ったことが分かります。

吉田島は古く鎌倉時代から村の名が記され、米作りをしてきた村です。余所者の集まるその様を見ていて、地元の人らは新町、河原町と呼んだようです。ここ移ってきた人の多くは、近隣村の次男、三男の方々に、中には火事に遭い馬まで焼いてし

まったので……という方もいらつしやいます。古いしがらみをすっぱり脱いだ人達は明るく、お互い気安く暮らし合ってきました。

この松田―関本間の新道は、怒田の切り通しが開削された明治三十五年(一九〇二)に全通しています。

喜楽座は不定時の興行でした。正月、盆に芝居が張られると、近在から集まる客で五百人収容の見物席は大入り満員、地元青年が舞台の廻し役など買って出る程の盛況だったそうです。

大きな芝居興行の間合は、地元の方の義太夫の披露、松田芸者の手踊り、浪曲、素人芝居、政治演説会などが行われていたといひます。

話はそれますが、明治三十二年(一八九九)の喜楽座開場の際に演じた役者、市川嶋三郎一座の座員で後年一座を興した坂東新蔵は内山(南足柄市)の出身と聞きました。「嫁に行くなら一に内山、二に山田」と昔から川下の人らに言われて来た内山は、いつも洪水に苦しむ村々を見下ろす山里にあって、永く平穏な暮らしのある土地柄のようです。そうした所に芸能は根付きまた育まれ、役者も生むのでしょうか。内山では先頃まで、舞踊歌舞伎が行われていたそうです。

宣伝マンの春さん

ここで、開成町文化財保護委員をなさっていた青木貞男氏がお書きになった「十文字橋と河原町」の中に引用されていた一文、「宣伝マンの春さん」を紹介します。

見るからに頑固そうな人だったが意外に声の優しい人だった。この人が喜楽座の人気者で宣伝を受け持っていた。和服姿で人力車に乗り赤いケットで前を包み、大きな太鼓を抱きかかえる様にして、デレンコ、デレンコとたたく。人力車の背後に立つるしてある芝居や映画の大きな宣伝ビラが風にひらめく。こうしてこの界隈の村々を廻って歩く。人力車だから走ると言った方が適切であろう。だが車を引く人は大変な労苦だ。汗がしたたる。太鼓の音が遠くから聞こえて来る。子供が、婦女が、若衆があつちこつちから道路に飛び出て来る。今や遅しと春さんの車を待つ。人力車に乗った春さんが来た。しばし太鼓を打つのを止めた春さんの「今夜来てよー」と優しい声があつちこつちから風でビラの表裏が変化しながら人力車は行く。春さんの宣伝は長く、喜楽座の閉座までつづいてこの土地の人々を楽しませてくれた。喜楽座よ、春さんよありがどう。(「どろんこ抄」より)

喜楽座の思い出

この一文を読んで、思い当たることがあります。三十年程前になりますが、継ぐ人が無くなった上島地区(吉田島)の念仏講の五人の方にお集まりいただき、お念仏の録音をした折のことです。録音を終えての雑談で喜楽座の話になった時、おチカ婆さんが、「喜楽座にヨールさんておつかねえ人がいてヨールが入ろうとすると入れてくれないのよ」と言っていたことを。おチカさんの兄さんの敬康さんは小遣い稼ぎに喜楽座の下足番をしていた子供の一りで、もしかして幼い妹のチカさんを内緒で芝居小屋に入れようとして春さんに咎められたのかもしれない。子供の頃に座の下足番をしたという人は何人かいました。「馬力屋の慶ちゃん」はヨール引きが上手でヨールこうやって(掌を縦に揺らし)引いたってヨール」と父親から聞いたと言いつつ話して下さる人もいて、河原町の子供達は座の幕引きまで手伝い、小遣いにしていたのです。慶ちゃんこと、杉山慶造さんは先の戦争に征つてビルマで亡くなりました。

今は喜楽座のことを知る人は僅かで、語り継いで下さる方もなくなりましたが、ただお一人、座の隣りに生まれ住んで、今年

九十三歳になれる七沢淳さんはお元気で、幼いとき、芝居を観たそうです。小屋の入口を入った右側に下駄箱があり、左側の切符売場の奥の階段を上ると、角に売店があつて、そこで南京豆を買って食べたこと。座が休みの雨の日にチャンバラごっこをして遊んだこと、わが家の大きな鏡の前で役者が化粧をしていたこと、などを思いだし思い出した。

喜楽座の終焉

開場当時は近在から集まる客で賑わった喜楽座でしたが、明治四十二年(一九〇九)隣の松田町に「演芸館」が出来ると、次第に座の営業に差し障つたのでしようか、座主の交代が多くなりました。

この頃の喜楽座を含めた松田周辺の娯楽、演芸については、横浜貿易新報の記事から抽出してまとめたのが表1です。

大正三年(一九一四)吉田島にも電灯が点いたのですが、巷では既に活動写真が流行り始めていて、芝居は廢れるばかりでした。そこで、喜楽座も大正十三年(一九二四)から映画上映を試みたのですが、それも二年ほどで松田「金時座」の活動写真専門の上映には敵わなかつたようです。

明治から大正、昭和にかけて芸能、文化、娯楽の場として多くの人が足を運び、親しまれてきた喜楽座でしたが、昭和二年(一九二七)に小田急線が開通すると、視線が小田原に向けられ、座は全く忘れられて、昭和五、六年頃、遂に閉座に追い込まれました。

その後建物は人手に渡り、七、八年の間、うどん屋が営業し、機械を入れた精米業も行われていたと言いますが、間もなく終戦になりました。住宅事情の悪い戦後は、建物の隅々を改造して人が住み継いでいましたが、昭和四十三年(一九六八)見るのも痛々しい廢屋となった喜楽座の建物は、役場が買い取つて壊されました。

おわりに

脈絡ない話になりましたが、吉田島の河原町に「喜楽座」があつたこと、私の祖父がその大道具師だつたこと、近在の人等が来て活気に満ちていた街のこと、過ぎた日のなかで生き生きと暮らしていた人達のことなどを確かめるように、探り出すように、懐かしみ思い出しています。

吉田島にあつた「喜楽座」という芝居小屋の名を覚えていて下されば幸いです。

(表1の作成協力・大井みち)

表1. 松田周辺(足柄上郡)の娯楽、演芸(明治42年~大正4年)

横浜貿易新報
「松田方面」より抽出

西暦	和暦	月	日	興行	場所
1909	明治42	2	20	東京大相撲 常陸山・梅ヶ谷一行 二百余名(三日間)	松田十文字
		11	7	東京女義太夫 竹本重子・竹本重之助一座	上大井平野和吉方
		11	27	市川國太郎一座	喜楽座
		12	2	小田原天狗連の喜劇, 小田原芸者の新内出語り	喜楽座
1910	明治43	2	5	岡本美代喜・市川琴丸一座の源氏節「小栗判官一代記」	演芸館
		2	15	市川高十郎・市川小雁次・國太郎一座	吾妻亭
		5	11	市川松鶴一座	演芸館
		6	28	中村歌好一座「美色・名花の咲分」	喜楽座
		7	2	奇術師女天一一座	喜楽座
		11	27	坂東十太郎改新蔵一座(大人気)	喜楽座
1911	明治44	1	1	竹本島之助・播志磨一座(大人)	演芸館
		2	19	東京義太夫 竹本巴光一座(大人)	牛島盛徳寺
		3	3	國十郎一座「道了利生記 錦織神社の由来」「妹背山」	喜楽座
		4	2	市川國太郎一座, 地元娘俳優連合同	吾妻亭
		4	3	松田, 向原の天狗連の素人芝居	演芸館
		4	28	山北南枝太夫の高弟鶴澤平の後幕(披露義太夫会)	岸、湯坂久安寺
		6	27	岡本春吉一座 玉乗りと手品	演芸館
		7	15	松福亭時雄一座 「赤穂誠忠録」浪花節(大人)	演芸館
1913	大正2	9	20	美根尾一座 源氏節(好評)	喜楽座
		10	9	東京相撲 成尾崎・野州山・玉崎他数十名の力士一行	十文字橋西詰
		10	10	娘義太夫・竹本文字八一座, 掛合浄瑠璃と手踊り	喜楽座
1914	大正3	1	13	中村舜次郎 自宅にて素謡会(清風会会員)	中村邸
		1	21	都一座の新派劇(一日千人の入)	松田座
		3月下旬		故出羽ヶ崎の追善相撲(東京力士150名)4日間	下大井
		4	21	松田町芸者25名の芝居「先代萩」「安達」「鎌倉三代記」	松田座
		10	20	牛馬商による競馬会(年々婦人小児迄出掛けて盛んなる)	大口
1915	大正4	1	27	地球齊マンマル一座の奇術	演芸館
		2	11	兎狩と梅見	曾我村
		11	4	横浜桜川久孝一座の幫間芝居	演芸館
		11	25	女相撲, 大関芳野川 若湊一行	松田駅付近広場
		12	7	大曲馬軽業	山北
		12	7	活動写真「御即位禮実況」	演芸館

※ 日付は興行初日を表す

※ 所在地 「喜楽座」は吉田島 「演芸館」は松田 「吾妻亭」は山北

小田原桐座について (七)

— 由緒書の検討を中心に —

荒河 純

五、明治以降の桐座

(一) 桐尾上廃業と分座

桐尾上廃業

明治に入ってから的小田原桐座は由緒書の次の文から始まっている(一)。

明治ノ始メ御一新ニ付女舞太輔御廢シニ相成候依之尾上名籍ヲ廢シ大橋輔太郎方同居ト成ルナリ尤桐座芝居狂言座ノ儀ハ古来ノ儘有之也

これは女舞家の桐尾上を廃業し、大橋輔太郎すなわち大橋林當の家に同居するというものである。もともとこの八代目桐尾上は大橋林當の十六歳下の妹であるから、実の妹が兄の家に同居することになったということに過ぎないのだが、一六六一年から二百年余続いた桐家がここに終止符を打ったという意味は大きい。

この八代目桐尾上の名は「カク」といった。カクは一八四五年生まれであるから、もし明治元年(一八六八)に廃業したとする

と二十三歳であった。ただし、このカクは明治に入る前に「四郎治」という男性と結婚し、一八六六年、二十一歳のときに、「むめ」という女子を産んでいる。これは何を意味するのだろうか？ おそらく、兄の林當はこの妹とその婿に桐座の運営全体を任せるともりであったのではなからうか。わざわざ婿に神事舞太夫大橋家の当主を示す「四郎治」を名乗らせたとなると、父親である義友の遺言であったのかもしれない。そして、九代目桐尾上を継ぐ予定の女子も産まれたのである。

しかし、明治維新で情況は一変する。慶応四年(一八六八)二月に小田原藩は朝廷に従うことを誓い、四月には東征大総督・有栖川宮が小田原に着陣する。大橋林當は晩年、この東征軍が箱根の山を越えたときの心境を次のように綴っている(二)。

是より後天下一変し諸侯の封建を廢し郡県の制とし、武士と刀劍共に廢して全国一般人民を挙て兵とす、軍制も亦□国の

戦法を編制し之を用ゆ、此の時より天下の諸事年々改正し更に一定を見る無し、予も又多年の宿望を果さず以後は世上の甚欲に關係せず只職業に従事し側ら風雅の道に遊び、和歌は三枝松觀朗師に学び、また仏教を信じ禅学は或る禅僧無觀老和尚に随ひ聊か其道を聴くのみ

本気で武士になることを願っていた林當にすれば、完全にその望みを絶つ変化であった。そこで、これまで小田原藩主の庇護の下に代々続けてきた女舞太夫家の存続は諦め、家業としての芝居小屋の運営だけを職業として存続させると考えたのである。

かくして、桐家は無くなり、四郎治、カク、むめの一家は大橋林當の家に同居することになるのである。元々、桐家と大橋家の住居は別であったと思われるが、おそらく桐座のあった同じ敷地内に別棟として存在したのである。どうなったのだろうか？ 大橋林當の戸籍を見ると、妹・尾上の欄には「当村百四十二番地ノ内七十八番戸買受、明治十二年五月廿五日分籍」とあるから、明治十二年(一八七九)三十四歳の時に、娘のむめ十四歳と一緒に

別居している。また、むめの欄に「妹尾上夫四郎治離縁長女」とあるから、尾上と四郎治はこの時以前に離婚し、むめは尾上の籍に入っていることが分かる。もしかしたら明治初年、林當の家に同居する段階で既に離婚していたのかもしれない。

伊勢原分座

小田原桐座の由緒書のほぼ最後を飾る事蹟として、伊勢原分座のことが記されている(一)。

明治五壬申年二月同国大住郡伊勢原村組合廿五ヶ村大惣代神戸村名主吉川正治より願ニ依テ右伊勢原村ニ当桐座出張トシテ分座致呉候趣ニ付足柄県庁江願上候処早速御聞濟ニ相成候間右場所桐座名儀ヲ以テ櫓ヲ上ヶ年内春秋両度ツツ興行致候其後御改正以來右場所打止候也依之右出張座取戻シ候也

これは明治五年に伊勢原村二十五ヶ村の惣代の吉川正治より伊勢原に桐座の分座を作りたいという要請があり、これに応えて林當は分座を認め名儀も貸している。しかし、この年に二回興行が行われただけで、足柄県の芝居興行に対する法が改正されたため興行維持が難しくなり、分座を止め名儀も返したもので

ある。
伊勢原での興行の場所、様子、演目などの情報が無いかと調べているが、わずか一年足らずのことのためか全く情報は得られていない。ただ、伊勢原は大山詣での起点となった土地柄、古くから人や文化の流れが多くあり、種々の芸能も盛んであったものと想像している。

四ツ谷桐座の名義問題

江戸桐座は、天明四年(二七八四)の市村座に替わる控櫓興行以降どのような変遷を辿ったのであろうか。元々控櫓興行は五ヶ年の約束であったため、ちょうど五年目の天明八年(二七八八)十一月には市村座が興行を再開している。

歌舞伎年表に桐座の名が再び登場するのは文化十三年(一八一六)のことである(3)。市村座は前年から不入りのため休座しており、やはり五ヶ年間の契約で交替することになったのである。この興行は不調で、さらに半年後には火災で中村座と共に類焼した。二ヶ月後には仮普請で再開しているが、この頃には、桐長桐は興行の一線から身を引き代わりに市川団之助が実質的な座主となっている。
団之助は元々同座出勤の女形であった。不況に同情して金を

融通したところから経営に参加したのだが、借金続きの経営は徐々に団之助一人の肩にかかってくるようになる。折から土地の名主某が桐座を買収して都座名義で興行を思いついた。しかし、団之助は桐座を実質的に経営していたにもかかわらず興行権を持っていなかったため、団之助は桐座から追い出されてしまう。失意の団之助は文化十四年(一八一七)十一月二日に自宅で自殺したのである。ここで江戸桐座は終わっている(4)。

その後、明治五年(一八七二)九月、四ツ谷荒木町津ノ守(旧松平撰津守屋敷)に間口十二間奥行二十二間の座を新築し桐座と称した。これは、先の市川団之助の遠孫に当たる市川団弥が三代目団之助を継ぎ、同人の後見人の内山新造と連名で再興したものであった。開場は翌明治六年五月で、明治十三年(一八九〇)まで続いたとされているが、桐座としては実質明治十八年(一八八五)頃までの興行であった。

小田原の劇場大道具師である中川金太郎・初太郎父子が記録した『桐座記録』の冒頭に以下のような一文がある(5)。「明治初年頃東京四ツ谷へ桐座貸したること」これは、小田原桐座の大橋林當が四ツ谷の市川団之助に桐座の名義を貸したと読める。

石井富之助氏は、利害関係の無い大道具の中川金太郎が書いた一文なのでむしろ信用できるとしているのに対し、柏木香秋氏は四ツ谷桐座の名義は、三代目団之助が江戸桐座から引き継いでいるとしている。

この名義論争の決着をつけるのは困難であるが、もし、石井説が正しいとすれば小田原桐座の空白期間と四ツ谷桐座の活動期間がちょうど重なり納得できるものである。

(二) 町の変化と桐座運営交通の変化

小田原の街には二本の大きな街道が走っている。東西に走る東海道と南北に走る甲州街道である。桐座はこの甲州街道沿いにあったわけであるが、明治初年から後期に至る間にこの二本の街道の力関係の変化について考えてみたい。

現在のわれわれの感覚でいうと東海道の方が交通量において圧倒的に勝ると考えられるが、明治の初めにはそれほど大きな差は無かったのではないだろうか。

甲州街道は関本宿の手前で矢倉沢往還につながり足柄峠を越えて甲州まで繋がっている。東海道には天下の險といわれた箱根があり、足柄峠と比べると険

しく難所であった。また、この矢倉沢往還は、大山、道了尊、富士山を結ぶ信仰の道でもあり、庶民にとっては矢倉沢往還の方が使いやすい街道ではなかっただろうか。

桐座のあった寺町付近は甲州街道の出発口に当たると。これに加えて海から寺町まで舟で来ることも出来たようである。明治の頃までの山王川は現在の川筋とは異なり甲州街道のすぐ東脇を流れており、現在桐大蔵の墓の史跡表示が建っている長安寺の入口は川幅三メートル、水深三メートルもある比較的大きな川であった。海からこの山王川を遡って来ると、ちょうど寺町の辺りに舟着場があり、ここが荷物の集散所になっていた(5)。また、道路は秦野や山北方面



図1 仙狐稲荷社と大橋林當の扁額
(かつて桐座の在った場所の隣に現在も在る)

からの道が寺町付近で一本に重なつた頸の部分に当たつており、船方、荷役や、各方面から小田原に來た人たちが弁當を使うので、煮売屋が何軒もあった。桐座の大道具師であつた池上の中川金太郎・初太郎の家も煮売屋をやつていたとのことである。

このように、桐座周辺は小田原の街外れではあつたが、少なくとも明治の中頃までは北の玄関口として賑わつていた様子が見て取れる。ところが、明治になつて始まつた文明開化の流れは徐々に東海道側の偏重をもたらずことになるのである。

先ず道路の整備が進められる。明治十三年(一八八〇)には箱根湯本まで人力車で行けるようになり、明治十四年(一八八二)には小田原―熱海間の県道が開通する。また、鉄道は明治五年(一八七二)に新橋―横浜間で陸蒸気が走るが、幹線鉄道計画が中山道ルートと東海道ルートで意見が割れ、東海道ルートに決着したのが明治十九年(一八八六)と遅くはなつたが、明治二十年(一八八七)には国府津まで延びた。国府津以西が問題で、急勾配、トンネルおよび橋梁工事に手間取り御殿場を経由して沼津まで開通したのは明治二十二年(一八九九)であつた。同じく明治二十二年には国府津―小田原間は馬車鉄

道で結ばれるようになる。これは明治三十三年(一九〇〇)に電化され小田原電気鉄道となつた。また、その先の熱海までは豆相人車鉄道としてその四年前に繋がつてゐる(6)。

当時の小田原の街は小田原電鉄の駅があつた幸町から青物町あたりが最も賑やかであつたようである。

新興劇場

片岡永左衛門『明治小田原町誌』の中に、小田原芝居関係として次の記事がある(7)。

明治二年七月四日

玉滝坊維持の爲め、境内に劇場建築の公許を得て上棟す。然共も、開演の月日は詳にせざるか当町最初の劇場なり、従来は荻窪村、寺町に舞大夫桐屋上の桐座の外は許るされず、桐座と雖も劇場としてには非ず神事舞の舞台にて、此座に於いて折々歌舞伎狂言を爲したるも藩士の観劇は禁したり。開演の際は、屋前に掛けたる櫓に紺地に桐の紋及御城附女舞桐屋上と染出したる幕を張れり。

明治九年四月一日

劇場鶴座開場す。旧来小田原の藩制として藩士は総て観劇等をせしめず、故に町中に劇場を許さず、芦子村寺町に桐座の壺座を許可せしみにて、相撲も

谷津大稻荷社内又は竹の花法授寺境内に限り興行し、寄席等も在らざるしに、明治二年に玉龍坊地内に許可せしを始めとし、茶畑町に寄席を許可してあり、筋違橋、宮ノ前、萬町、林岳、大工町等に壺起壺例し、明治七年六月欄干橋町元本陣清水にて中村璃寛の一座開演せしが、今回茶畑町寄席を修繕し劇場とせり。

明治十四年十一月十一日
劇場若竹座落成す。

新興劇場である茶畑町の鶴座、幸町の若竹座といずれも、東海道に隣接して建てられたのである。

寺町有志による桐座運営

明治初期の小田原桐座で興行が行われていたかどうかの記録は無い。興行が行われていたとしても、極めて低調なものであつたと思われる。桐座に近い伝心庵(現、中町一丁目)の米山豊昭氏は、明治初期の桐座について次のように書いている(8)。

明治の初期に、桐座は昔の姿であつたかどうかは判然としないが、尾上の舞の廃絶と共に、大橋家の勢力は次第に衰えてきたものと想像される。一説には大橋家にかわつて、地元寺町の人々が経営して、細々ながら

維持していたともいう。その当時はおそらく廃座同様のみじめな姿で、腐朽するままにろくに手も入れなかつたと思われる。

この老朽した桐座の建物は明治十八年(一八八五)八月に寺町有志の手によつて新築される。この時の記録を、同じ寺町で老舗の菓子屋を営んでいる津田音次郎氏が記している(9)。

関東大震災(大正十二年九月一日)で壊滅した桐座の建物は明治十八年八月に新築されたもので其規模は総坪数四百八十五坪余で総二階建、棧敷二百八十坪。入場仕切場一坪。花道五尺巾八間。舞台間口九間興行四間半回り舞台四間。せり出し九尺間口六尺一ヶ所スツポンせり出し三尺四方二ヶ所俳優楽屋二十二坪。道具師部屋大小道具部屋三坪。太夫座二坪衣装部屋四坪湯殿便所三坪其他。観覧席最後部に一幕見席等、此際の建築出資者は磯崎半次郎、磯崎大次郎、中戸川忠三、小瀬村伊兵衛、石井音二郎、の五氏で改築記念興行に大阪から中村福助大一座を招いてコケラ落しの興行を行ったが結果は良好ならずとか。

以降の興行に関しては、大道

表1. 明治中期以降、小田原桐座興行記録

年	月	興行主	役者	演目
明治18年 (1885)	8月	(世話人) 宮内庄兵衛	中村福助、坂東彦十郎、坂東秀調、坂東鶴之助、中村政次郎	だんまり市原野、今川大合戦、那須与市西海碓(乳母争)、寿會我対面
明治20年 (1887)	8月	(小屋貸し) (世話人) 宮内庄兵衛	市川久蔵、沢村訥子、沢村源之助、沢村源平	伽羅先代萩、時今知桔梗旗揚、
明治24年 (1891)	4月	(主任) 宮内庄兵衛	川上音二郎、藤沢浅次郎、佐藤歳三、青柳捨三郎、金泉丑太郎、若宮万次郎(壮士芝居)	経国美談、大井憲太郎、島田一郎梅雨日記、螢気楼将来日本、五大州、西郷隆盛營勢力、演説・オッペケベ
明治24年 (1891)	8月		坂東家橘、中村勘五郎、中村富十郎、中村右多作、坂東竹松、尾上栄三郎	御目見得だんまり、富治三樹扇曾我、近江源氏先陣館、伊勢音頭恋寝刃
明治25年 (1892)	8月	(世話人) 宮内庄兵衛	市川左団次、市川荒次郎、市川米蔵、市川時若、市川蓮升、市川紫若	慶安太平記、神靈矢口渡、籠釣瓶花街酔醒
明治26年 (1893)	4月		望月正義、村田正雄、亀井鉄骨、金子仙之助、望月梅子(新派)	清水定吉、相馬事件
明治26年 (1893)	8月	宮内庄兵衛	中村芝翫、片岡市蔵、中村福助、坂東秀調、中村翫助、片岡松童、中村児福	月欠血恋路宵闇、菅原伝授手習鑑、八陣守護城、京人形
明治27年 (1894)	1月	(請元) 荻田貞竜	山口定雄、本田小一郎、佐藤幾之助、津坂幸一郎	大悪僧
明治28年 (1895)		(請元) 荻田	沢村訥升、尾上幸蔵、沢村百之助、市川小団次、沢村源平、沢村宗三郎、沢村春之助	有馬猫騷動、苜萱桑門筑紫縹
明治29年 (1896)		(建元) 集月楼 高杉熊次郎	市川九蔵、市川紅若、岩井松之助、市川猿三郎、市川茂々太郎、市川喜猿	仮名手本忠臣蔵、鎌倉三代記、明烏夢泡雪
		(請元) 宮内庄兵衛	角藤定憲五十名大一行(元祖壮士芝居)	小田原出兵(騎兵小野田勝三郎名誉戦死)
明治37年 (1904)	1月	(請元) 五名	旧尾上扇昇、市川猿童一座	
			鳥居悟楼、恩田五郎(新派)	新派劇
			坂東鶴之助、沢村淀五郎	仮名手本忠臣蔵
明治39年 (1906)	1月		嵐芳五郎	佐倉宗五郎、鏡山古郷錦絵
明治39年 (1906)	3月	(太夫元) 羽衣座石川	尾上菊五郎、尾上梅幸、尾上松助、尾上菊雄、尾上蟹十郎、尾上菊三郎	夜討曾我、紅葉狩、清水一角、摂州合邦辻、侠客御所五郎蔵
明治39年 (1906)	8月		中村又五郎、尾上幸蔵	伽羅先代萩、伊勢音頭恋寝刃
明治40年 (1907)	1月	改め役員	嵐橘縁、市川姉蔵	塩原多助一代記、中幕雪月花
明治40年 (1907)	8月	(小屋貸請元) 斎藤万次郎	中村吉右衛門、沢村宗十郎、市川猿十郎、中村吉之丞、沢村百之助	朝比奈門破、奥州安達原、伊勢音頭恋寝刃
明治41年 (1908)	1月		片岡当三郎一座	
	8月		坂東鶴之助、中島伝幸、沢村淀五郎	忠臣蔵
	10月		佐藤幾之助一派(新派)	
明治42年 (1909)	8月	(太夫元) 佐治輝次郎	市川女寅、市川男寅、片岡十蔵、市川九団次	だんまり、源平布引滝、川中島

*山本二郎「桐座記録」『早稲田大学教育学部学術研究』第14号(1965)より桐座部分のみ抜粋

具師の中川金太郎・初太郎父子による「桐座記録」の記載が最も詳しい。この記録を整理して表1に示した(5)。これを見て行くと、明治二十年代、特に明治二十四年の川上音二郎興行から六年間は、年一、二回の大芝居興行であるが、寺町有志による興行がコンスタントに続けられているように見える。特に明治二十四年の川上音二郎一座の興行は大

騷動を巻き起こすことになるので、次号で別途詳細を述べたい。しかし、明治三十年代になると興行も途切れがちになり、明治三十九年以降の興行主は寺町の宮内氏など寺町の有力者ではなくなり、プロの興行師に依頼していることが分かる。明治四十年二月には飯山常次郎、磯崎大次郎、小瀬村定次郎、相沢文次郎、宮内市五郎らによって株式

で経営を行っているの、自分たちで興行を打つより、劇場貸しに切り替えたものと思われる。数は少ないが、この頃大当たりをとった芝居もある。一つは明治三十八年(一九〇五)八月興行の坂東鶴之助、同鶴蔵一座による「仮名手本忠臣蔵」である。大序より討ち入りまで通して約十日間打ち続け相当な大入りであった。また、翌年三月の東京大

歌舞伎では、襲名三年後で脂の乗った六代目尾上菊五郎、梅幸など音羽屋一門が総出演した。近郊より早朝から詰めかけ八時頃には木戸止めとなるような盛況であった(10)。しかし全体として興行は不振で、明治四十二年八月以降、荻田貞龍、津田松五郎、武田市五郎、勝俣浪之助、中戸川万次郎、浅見喜太郎氏等によって株式組合が

出来、組合の興行の外、劇場貸し等で続けたが、遂に明治の末には足柄青物市場に売却された。芝居が行われないときには、桐座の中でも野菜を並べて売っていたという話もあり、名代の劇

キャンパスおだわら学習講座<公募型市民企画講座>

歴史講座『小田原史談会セミナー』第15回

日時：平成28年11月19日(土)午前10時~12時
場所：小田原市民交流センター(UMECO)1階 第1・2会議室
講座：『火の国イタリアと日本』講師：杉山浩平氏
一ソンマベスビアーナ(ポンペイ近郊)発掘の記録一
申込先：電話0465-33-1890 小田原生涯学習センターけやきの会
定員/費用：50名 / 500円

場も悲惨な状態となっていた。

それでも、劇場復活を狙う者がいて、大正八年(一九一九)には真鶴の今井悌三郎が興行権を得て、さらには活動写真常設館という試みもあったようだが、いずれも失敗している。

そして、大正十二年(一九二三)関東大震災によって遂にその息の根を止められるように消滅したのである。(つづく)

- 注 (1) 石井富之助「劇場桐座由緒書」『神奈川県史研究』第九号、神奈川県、一九七〇年
- (2) 大橋林當「雑記」大橋家所蔵
- (3) 伊原敏郎「歌舞伎年表」第六巻、岩波書店、一九七三年
- (4) 木村錦花「小田原桐座の発見」『神奈川県文化財調査報告』第十二集、一九五四年
- (5) 山本二郎「桐座記録」『早稲田大学教育学部学術研究』第十四号、一九六五年
- (6) 『小田原市史』通史編・近現代、小田原市、二〇〇〇年
- (7) 片岡永左衛門「明治小田原町誌」小田原市立図書館、一九七五年
- (8) 米山豊昭「小田原桐座について」『寺町今昔記』寺町自治会、一九六六年
- (9) 津田音次郎「寺町今昔記」同右
- (10) 「小田原の芝居の思い出」『小田原タイムズ』昭和二十五年六月

小田原史談会セミナー
「小田原の歴史を掘る」要旨

第十四回

(小田原の歴史を掘る第六回)

平成二十八年八月二十七日

「江戸時代の小田原」

講師 山口剛志氏

(小田原市文化財課)

近世の遺跡、遺物を研究する考古学を昭和四四年以降「近世考古学」という。

小田原城の特徴

惣構があり、丘陵部に土塁の中世東国の城と低地の石垣を伴う近世の城がある珍しい城。

小田原城の歴史

発掘調査からも小田原城の歴史が分かる。大森氏が八幡山古郭に城を築いたとされるが、遺跡は未確認。板橋見付の御組長屋遺跡で十三世紀後半から十四世紀前半の土器が出土。この頃から宿場があった。御城米曲輪の最下層の地層から北條早雲時代のかわけが出土。二代氏綱は小田原城を本城とした。明の陶磁器が出土。三代氏康の時に二の丸外郭完成。四代氏政の時に低地部三の丸外郭造営。五代氏直の時に丘陵部三の丸外郭(三の丸新堀を発掘)、惣構を造る。前期大久保氏時代の玉石の石垣を発掘、この時代にも城を構築した。

大久保氏が改易された時、門や櫓が破却された。稲葉氏時代に石垣の近世化工事が行われた。

近世小田原城と城下の暮らし

考古学調査からも暮らしを窺う。二の丸御殿跡で元禄地震の焼けた壁土を検出。藩校跡で硯などの文房具が出土。また、鍋島焼が出土し、鍋島藩主が病気で小田原藩に世話になり、御札に陶磁器を贈ったとの記録と符合する。

三の丸の家老屋敷跡から一分金、キセル、鍋島焼、土人形、漆器碗、マイルカの遺骸などが出土。接合補修した陶器が出土しており陶器を再使用している。富士山噴火の火山灰を検出。

城下の旅籠跡で初期の唐津焼、別の旅籠から陶磁器の碗・皿、徳利、燈明具、下駄、土製の碁石など出土。また、七〇本余りのガラス製髪飾りが出土しており、飯盛女がいた旅籠であることが文献だけでなく、発掘調査でも分かる。

地震の痕跡

天明小田原地震で住吉橋の橋台石垣が崩落。大正関東地震で二の丸住吉堀の北壁石垣が崩落。三の丸大久保雅樂介邸跡で大正関東地震の地割れがあった。地滑りで三の丸弁財天の井戸の穴が水平方向にずれていた。惣構傳摩寺西の土塁、小八幡東畑で地割れが見つかった。住吉堀で墳砂の痕跡があった。(山口 記)

小田原史談会 秋麗の甲斐路へのお誘い

～石井啓文氏(郷土歴史家)とめぐる～

武田氏ゆかりの史跡と山梨県立美術館

甲州の覇者武田氏滅亡に関わる史跡をめぐり、さらに武田勝頼に嫁ぎ、勝頼に殉じた桂林院(北条氏康・女)の足跡をめぐります。芸術の秋のひとつ、山梨県立美術館で名画の鑑賞も組み込みました。紅葉の染める景勝と旅のつれづれを楽しみませんか。

日時：平成28年11月22日(火)

集合：小田原駅西口 午前7時50分 出発：午前8時 (午後7時帰着予定)

参加費：9,000円 (昼食代込、当日徴収します)

行き先：新府城(韮崎市) 武田氏最後の城、八ヶ岳・南アルプスの眺望に期待
武田八幡宮(韮崎市) 桂林院が武田勝頼の武運長久を祈願した願文あり
社殿は国指定重要文化財

景德院(甲州市) 勝頼・桂林院・小田原から桂林院に従った侍女たちが眠る
山梨県立美術館(甲府市) ミレー「種を蒔く人」をはじめとする名画を展示

募集人員：40名(最少催行人数 20名) 申込先着順

申込方法：現在申込受付中 11月3日まで

NPO法人 小田原市生涯学習推進員の会 電話：0465-33-1890

(従来の申し込み方法と異なりますので十分ご注意ください)

お問合せ：小田原史談会 電話 0465-34-8363 (平倉)

小田原史談会 初詣へのお誘い

武蔵一宮氷川神社と鉢形城址巡り

日本でも指折りの古社である武蔵一宮神社での祈願と、北条氏政の弟氏邦が整備して治めた鉢形城跡での歴史散策で、新春の良き日をお過ごしください。

日時：平成29年1月17日(火) 小雨決行

集合：小田原駅西口 午前7時50分 出発：午前8時 (午後7時帰着予定)

参加費：9,500円 (昼食代込、当日徴収します)

行き先：武蔵一宮氷川神社(さいたま市) 関東にある氷川神社約280社の総本社
鉢形城址(寄居町) 北条氏邦が整備拡充、北条氏関東支配の重要な役割を担った
国指定史跡

募集人員：40名(最少催行人数 20名) 申込先着順

申込方法：12月1日より12月20日まで

NPO法人 小田原市生涯学習推進員の会 電話：0465-33-1890

お問合せ：小田原史談会 電話 0465-34-8363 (平倉)



特別賛助会員

紳士服の **アメリカヤ**

手打うどん 小田原城趾前 田毎

税理士法人 **報徳会計**

のれんと味 **ふるほ**

伊勢治書店

ちんぎょう本店

㊦ **かまぼこ**

割烹料理 **鳥かつ楼**
うなぎ

(株) **オクツ薬局**

和菓子菜の花

㊧ **小田原ガス**

杉崎茂法律事務所

小田原報徳自動車

平井書店

かまぼこ籠 **清**

(有) **古屋花店**

かみやま小児科クリニック

株式会社 報徳

興電社

建築金物 (株) **星崎仲吉商店**
家庭金物

本多時計店

学生専科 ㊨ **マルク**

(有) **小松石材店**

曾我の梅子 **美の政**
塩辛・かまぼこ

COMTEC コムテック株式会社

さがみ信用金庫

(株) **アルファ**

小田原史談(年四回発行)
創刊昭和三十六年一月
公創立昭和二十七年七月

禁無断転載

振替

年会費 普通会員三千円
〇〇二〇二六四三三六
小田原史談会

小田原史談会ホームページ URL <http://odawara-shidan.hustle.ne.jp/>

小田原史談会

検索

落穂集

今年の夏はリオ・オリンピックのメダルラッシュで盛り上がった。閉会したとき、もっと会期が長かったら良かったのと思った人も多かっただろう。▼オリンピックの歴史を紐解いてみると、今の二週間余の会期になったのは、一九三二年の第十回ロサンゼルス大会からである。第二回から第九回までは、二ヶ月から六ヶ月の会期となっている。▼会期が長いと、同時並行でないので競技会場も少なくて済むだろう。観客も一時期に集中する事が少ないので、余計な交通網の整備も必要無い。これが、まさしくエコではないのか。競技日程もタイトにしないで良いので、選手のコンディション調整にも有利である。いろいろメリツトがありそうな案だと思ふのだが、議論された気配はない。▼おまけに、二〇二〇年の東京大会は七月末から八月初めの、暑さがピークの時期に開催されることが決まっている。何でも、IOCの最大スポンサーである米国テレビ局の都合だからか。前回の東京大会は十月十日であったことを思い出す。アスリート・ファーストと言われながら、逆行しているように思える。▼今号は、学界から正統に評価されなかった不遇の考古学者の生涯を、弟子の杉山博久さんが熱く語った「直良信夫」。小田原の歴史再発見シリーズとしてお馴染みである石井啓文さんの「居神神社」。新たに深野彰さんをお迎えして執筆いただいた謎の絵師「雪村」。そして藤平初江さんには「喜楽座」を中心とした十文字橋付近の賑わいを書いていただいた。▼このように、内容が盛りだくさんとなったため、「片岡日記」は今号はお休みとした。(編集子)

「小田原史談」原稿募集

論考・紀行・証言等の原稿をお待ちしております。お問い合わせは左記へ。

南足柄市関本七三〇六
電話 〇四六五七三〇八七九

荒河純